

特集

3 全面実施への助走 第3回

「目指す力」と実践をつなぐ カリキュラム

4 課題整理

どこが難しい？ カリキュラムづくり

— 読者アンケート結果より

6 理論編

目指す力を育むためにカリキュラムづくりは不可欠

教育創造研究センター所長／北海道教育大特任教授 高階玲治



8 実践編 1

系統性の整理と手立ての充実で 「学び」を生かす子どもを育む

鹿児島県鹿児島市立山下小学校



14 実践編 2

「ヘキサゴンプラン」を 全教師の日々の教育活動の柱に

栃木県宇都宮市立上河内西小学校



20 実践編 3

「視覚的カリキュラム表」で 見通しを共有しねらいへ向かう

新潟県上越市立春日小学校



連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

教師人生を通して指針となった鋭くも温かい恩師の存在

山形県山形市立第四小学校 校長◎鈴木弘康

26 Let's go! 外国語活動

担任と外部人材との役割分担を、管理職も協力して明確化

埼玉県蓮田市立蓮田南小学校

28 つながる学校と家庭の学び

保護者を通して社会性を学ぶキャリア教育

東京都足立区立東伊興小学校

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

Vol.3

教師人生を通して指針となった 鋭くも温かい恩師の存在

山形県 山形市立第四小学校校長 鈴木弘康 SUZUKI HIROYASU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、鈴木校長が語る。

「いい授業だった」
心に染みだ評価の言葉

新採で赴任した複式学級の小学校に5年間勤めた後、小さな町の小学校に異動しました。赴任後すぐに3年生理科の研究授業を担当することになりましたが、経験が浅い上に前任校がへき地の小規模校だったため、私の授業力を不安視する先生もいました。見返したいという思いもあり、毎日遅くまで指導案や教材を考えました。子どもが試行錯誤しながら学ぶ「自由試行」という方法で、一人ひとりが自由な発想を生かして

風車を作る授業を考えました。

当日、子どもたちは誰よりも勢いよく回る風車を作ろうと、生き生きと活動していました。授業の終盤、風車の軸を持つ子どもから「しびれる」「くすぐったい」という言葉が出た時、授業の成功を確信しました。最も伝えたかったエネルギーの概念を体感したことから出た言葉だと思ったからです。

ところが、事後研究会では先輩方の厳しい指導に圧倒されてしまいました。落胆してトイレに行くと、上村隆一校長が入って来て隣に並びました。私は思わず、「あんな授業で



1974 (昭和49)

新採として戸沢村立角川小学校に赴任。上沢分校に3年、本校に2年勤務

1979 (昭和54)

舟形町立舟形小学校に赴任。上村隆一校長と出会う



職員室でストーブを囲んでの何げない会話から学ぶことも多かったという(左端が鈴木先生)

1983 (昭和58)

山形大教育学部附属小学校(現山形大附属小学校)に赴任

2004 (平成16)

山形市立蔵王第二小学校に校長として赴任

2008 (平成20)

山形市立第四小学校に赴任

すずき・ひろやす 教諭時代は「授業が楽しければ子どもは集中する」という信念で教材研究を徹底した。舟形町立舟形小学校、山形大教育学部附属小学校、山形県教育庁義務教育課課長などを経て、2008年、山形市立第四小学校に着任。

すみません」と謝っていました。その時、上村校長から掛けられた言葉が今も忘れられません。

「いい授業でした。子どもたちは自作の風車で『風の力』を実感していましたね」

私が意図した授業のねらいを理解し、評価して下さったのです。努力が報われたという気持ちになり、自信を取り戻すことが出来ました。

上村校長は、少し変わった経歴をお持ちでした。台湾に生まれ、医専（後の医学部）を目指していたものの敗戦を迎え、帰国して師範学校に入り英語教師になられたそうです。とても穏やかな人柄で、どこか哲学者のような風格があり、いつも分かりやすい言葉で、しかし急所を突くような助言をされました。上村校長は「教育の根底には『畏敬』がある」と話されていましたが、まさにその言葉を体現するかのように、誰からも畏敬の念を抱かれる校長でした。

上村校長は新任の私に多くの仕事を任せてくださり、新たに導入する学校裁量の時間の企画を担当しました。私の不安を察したのでしょう。「君が提案すれば、先生方はきっと賛成するよ」と勇気づけてください

ました。しかし、上村校長から具体的な指示はなく、一から方向性を考える必要がありました。先生方の多くは、全校の合奏活動をテーマにする考えでしたが、私は「もつと子ども」の創意を引き出せるテーマはないだろうか」と検討を重ねました。

ヒントを求め、子どもと一緒に学校の横にある河原を歩いた時のことです。流木を指さし、「恐竜に見える」と言った子どもがいました。その瞬間に発想が広がり、全校児童が縦割り班で流木を集め、体育館で「恐竜展」を開く活動を企画しました。保護者や地域住民を招いて盛大に行い、活動は大成功に終わりました。

あえて具体的な指示をせず、教師の考えを尊重するのが上村校長のやり方でした。進むべき道を示し、自分の足で歩くように促してください。上村校長のような恩師に出会えたことは本当に幸運だったと思います。

本来の自分を出そうと 努力する先生を支えたい

その後も多くの先生との出会いがありました。教科指導や学校経営について貴重な教えをいただいた先生もいます。不思議なことに、上村校

自分の立ち位置を見つけ 自分を表現する努力が大切



長から何を学んだのかと問われると、具体的な言葉が出てきません。出会いから現在に至るまで、上村校長という存在そのものを鏡にして、「教師とは、管理職とは、どうあるべきか」を考え続けてきた気がします。それほど人間性の深い部分で影響を受けたのが上村校長でした。

昔に比べて先生方が忙しくなり、管理職が教師の力を伸ばすのが難しくなったと思います。だからこそ私は、上村校長がそうして下さった

ように、先生が本来の自分を出せる学校にしたいと考えています。特に若い先生には、職場に適応するだけでなく、自分の立ち位置を見つけ、自分を表現する努力をしてほしい。そのための支援は惜しみません。

教師にとって、人間として、若い日に本当の意味で人とつながる経験はとても大切なことです。私自身がつながりを求められる先輩になれるよう、上村校長に学んだことを実践し、伝えていきたいと思っています。

特集

全面实施への助走 第3回

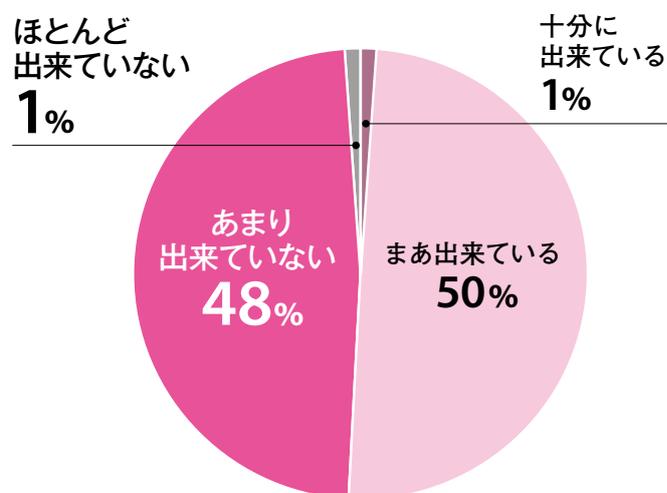
「目指す力と実践をつなぐカリキュラム」

カリキュラムは、広い意味で教育課程の全体を指すと捉えられ、

実践を通じて学校の教育目標を達成するための、いわば指導の設計図だ。新課程の実施へ向け、

「目指す力」、すなわち学校の教育目標と日々の実践をつなぐカリキュラムの重要性や作成のヒントを確認する。

Q 6年間や教科間での見通しを持ちながら、全体構想を、年間指導計画など日々の教育活動に落とすことは出来ていますか



*2010年9月、全国の「VIEW21」小学版読者モニター（小学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は73

——どろろが難しい？カリキュラムづくり ——読者アンケート結果より

左記のように、小誌が行った読者アンケートからは、カリキュラムをつくり、実践に生かすことが十分には出来ていない実態が見えてくる。背景には、学校全体でカリキュラムづくりへの意識を高めることや、日々の実践とつなぐことの難しさがあるようだ。

課題

カリキュラムづくりの現状

教育の重点に基づいたグランドデザインを作成し、それを意識しながら日々の教育活動を進めることが十分出来ていない

教育課程編成の方針、重点に沿った、教育課程の全体構想（グランドデザイン）を作成する



日々の教育活動を、教育課程の全体構想や年間指導計画を意識しながら進める



背景にある課題

カリキュラムに対して、
教師全員の意識を高めることが難しい

「教師のカリキュラムづくりに対する意識の低さがある。無くてはならないものになってしまう」

「カリキュラムを作成するのは一部の教師。全員で取り組む体制になりにくい」

カリキュラムと日々の教育実践を
つなぐことが難しい

「日々の学習指導や活動に追われ、それぞれの教育活動の意義やねらいが見えなくなる教師もいる」

「重点目標と具体的な実践事項に必ずしも一貫性がなく、日々の教育活動にまで生かしていないことが多い」

* 2010年9月、全国の『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は73

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

..... 解決のヒント

理論編

新課程では、教育内容の重点化を意識したカリキュラムづくりが不可欠

教育創造研究センター所長／北海道教育大特任教授 **高階玲治** 先生

P.6

- 重視すべき項目が多い新課程では、学校ごとに重点項目を定めることが不可欠
- 新しい教科書を見る機会を生かし、教師全員でカリキュラムをつくることで、共通認識を持てる

実践編

「目指す力」を明確にし、全教師でカリキュラムを作成。日々の実践を通じ、学校全体のねらいへ向かう

鹿児島県鹿児島市立 **山下小学校**

P.8

- 「生きる力」育成のために「学び」を生かす子どもの姿を追求。複数の教科で、生かすべき「学び」の系統や関連を明確にし、カリキュラムをつくる
- カリキュラムづくりにとどまらず、子どもが「学び」を生かすことの出来るように具体的な手立てを講じる

栃木県宇都宮市立 かみかわちにし **上河内西小学校**

P.14

- 「目指す児童像」から、教育の重点を定めた「ヘキサゴンプラン」を校長が中心となり設定
- 教師全員で、日常的な教育実践すべてで「ヘキサゴンプラン」を踏まえたねらいの達成を目指す
- 実践における教師の負担軽減を目指して「1人1アイデア」を取り入れる

新潟県上越市立 **春日小学校**

P.20

- グランドデザインに示した「二つの力、二つの心」を育めるよう、全教科・領域等の年間カリキュラムを1枚にまとめた「視覚的カリキュラム表」を作成し、それに基づき実践
- 子どもに身に付いた力を確認しながら、実態に応じてカリキュラムを修正していく

目指す力を育むために カリキュラムづくりは不可欠

教育創造研究センター所長／北海道教育大特任教授 高階玲治

新課程では言語活動や理数教育の充実など多くの重視すべき項目が示され、教科書も質・量共に大きく変更される。教育創造研究センターの高階玲治所長は、そうした中で、各校が教育の重点を定め、カリキュラムを作成する必要性を強調する。

カリキュラムの必要性

日々の実践で目指す力を育むために 学校としての指針が必要

カリキュラムは、「どうすれば子どもに力を付けられるか」を考える指導の設計図のようなものです。教育課程の全体だと、ここまでは広く捉えてください。子どもに付けたい力を学校全体として育んでいくために不可欠なものであり、新学習指導要領の『総則』でも各校で編成することが求められています(図)。

ただ、『VIEW21』のアンケート結果(P.4参照)を見ると、現在、カリキュラムづくりが「ほとんど・あまり」来ていない

と感じている先生が半数近くいます。これは、カリキュラムがなくても、教科書通りに指導すれば授業が成立していたからでしょう。

しかし、次年度からは、そのような方法は通用しなくなります。新課程では、言語活動や理数教育、道徳教育、外国語活動などの充実が求められています。また、情報教育、食育なども改善すべき事項として挙げられます。多くの事項がある中で、初年度からすべてを充実させるのは難しく、自校の実態や願いと照らし合わせて、どの項目から重点的に取り組むかを整理する必要があります。その整理に当たるのが「カリキュラムづくり」なのです。

新課程では教科書が厚くなります。教科用

たかしな・れいじ◎小・中学校教師を勤めた後、盛岡大教授、国立教育研究所企画調整部連絡協力室長、ベネッセ教育研究所所長などを経て現職。専門は教育経営学、学習指導、特別活動。主な編著書に『新学校経営相談12カ月』(全6冊)、『子どもと向き合う時間の確保と教師の職務の効率化』(共に教育開発研究所)など。



図 新学習指導要領 第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針・1(抜粋)

各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達の段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

図書検定調査審議会の報告書(※)にもあるように、今後は、教科書の内容を吟味して指導することがますます重要になります。しかし、その判断をすべて担任に委ねれば、学級ごとに学習内容や進度にばらつきが出て、学

※「教科書の改善について～教科書の質・量両面での充実と教科書検定手続きの透明化～(報告)」(2008年12月25日)より、「多くの教員や保護者の間に定着している『教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである』という教科書観」の転換が求められる旨が書かれている

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

年間の系統も失われてしまうでしょう。どのような力を、どのような方法で子どもに付けたいかという学校としての考えなしには、授業や日々の教育活動は出来ません。実践の積み重ねを目指す力の育成につながるために、カリキュラムは重要な指針となるのです。

カリキュラム作成のポイント

教科書の変更点の共有を きっかけに、全員でかかわる

『VIEW21』のアンケート結果では、カリキュラムをつくる際の課題として、「カリキュラムづくりに対する意識が低い」「全員で取り組む体制になりにくい」といった声が挙がっています（P.4参照）。多くの校長先生も同じような悩みを抱いていると思います。

カリキュラムは、管理職や教務主任だけでなく、先生方全員が協議に参加してつくるのが理想的です。まず、その過程で教師全員が共通認識を持てます。個々人のカリキュラム作成力、ひいては学校力も高まりますし、子どもの実態が反映されやすくなります。

新課程の全面実施を控えた2010年度は「みんなでカリキュラムをつくろう」と呼び掛ける絶好の機会です。新しい教科書が届くと先生方は皆、「何が変わったのか見てみよう」と思いますから、そうした関心をきっかけ

に新しい教科書を分析し、その結果を共有することから始めればよいのです。

例えば、次のような作業を年度内に行うと、カリキュラムづくりにとても有効です。

① 変わった点を確認する

担当学年の教科書を学年団で見つ、新たに変わった点など現行の教科書から変わった内容を、他学年の先生もいる全体場で発表します。発表の機会があればしっかり調べますし、全学年の内容を共有できます。詳細に説明する必要はなく、重要な変更点が大まかにイメージできる程度でよいでしょう。

② 変わらなかった点を確認する

同様に、変わらなかった点を共有します。必ず身に付けるべき基礎的・基本的な内容や、重点的に指導すべき点が見えてきます。

このように学校全体で変わった点・変わらなかった点を共有する中で、学年間の系統性と共に、新課程で重視すべきことや必ず定着させるべきことなどを意識できます。更に一歩進めて、「今年度は全学年で〇〇に力を入れよう」などの重点化を検討することでカリキュラムが形づくられていきます。

カリキュラムは、毎年ゼロからつくる必要はありません。以後は改善を重ねていけばよいのです。カリキュラムは作成後、それらを実践に反映させることこそが重要です。今後は、そのための研修も必要となるでしょう。

作成における校長の役割

① カリキュラムのバランスを整える

校長先生が自身のビジョンを持つことは大切ですが、それを押し通すのではなく、他の先生方から出てきた意見と統合し、全員のカリキュラムとすることが大切です。加えて、「もつと言語活動を入れたらどうだろう」など、新課程の重点項目を意識すると、バランスの取れたカリキュラムになるでしょう。

② カリキュラムづくりの「方針」を立てる

新課程の重点項目をすべて網羅するカリキュラムを一度につくり上げるのは困難です。「今年度は〇〇、来年度は△△に重点を置いて作成する」などと、複数年かけて「学校力」を高めていく方針を立て、先生方をリードしてください。

カリキュラムの必要性

- 日々の実践の積み重ねを通じて、子どもに目指す力を育むためには、不可欠な指針
- 新課程の全面実施により、各校が教育内容を重点化する必要性がより高まる

カリキュラム作成のポイント

- カリキュラムは、教師全員がかかわってつくるのが理想
- 意識が高まる新課程への移行時期を生かし、新しい教科書の変更点を確認することなどから始めるとよい

系統性の整理と手立ての充実で 「学び」を生かす子どもを育む

鹿児島県 鹿児島市立山下小学校

鹿児島市立山下小学校は、子どもがそれまでに身に付けた「学び」、すなわち既習事項を生かして課題を解決する学習を通じ、「生きる力」を育成する研究に取り組み、「学び」の系統や関連を整理してカリキュラムをつくり、「学び」を生かす子どもを育むための手立てを実践している。

課題

- 問題を解く過程よりも、結果を重視する傾向があった
- 自分の考えや思いを伝える表現の技能が十分とは言えなかった
- 体力・運動能力が十分とは言えなかった

カリキュラムの概要

- 「生きる力」を育むために、「学び」を生かす子どもを育むことを目指す
- 「学び」の系統や関連を整理し、カリキュラムをつくる
- 「知・徳・体」のすべての面から「生きる力」を育むために、国語、算数、道徳、体育を中心に研究を進める

カリキュラムと実践のかかわり

(算数の例)

- 知識・技能などの「内容」と、数学的な考え方などの「方法」の両面で、系統と関連を整理する
- 整理した「学び」を子どもが実際に生かせるような手立てを講じる

成果

- 教師が系統や関連を理解し、教えるべき内容を明確に意識した上で、日々の実践をするようになった
- その結果、子どもが自分で考え、意見を発表することに喜びを感じたり、友だちの「学び」と自分の「学び」をつなげて考えたりする姿が見られるようになった
- 「全国学力・学習状況調査」では、活用する力を問う問題が全国平均を大きく上回るようになった

S c h o o l D a t a

◎1878(明治11)年開校。「負けるな」「うそを言うな」「弱い者をいじめるな」が開校時からの校訓で、郷中教育を受け継ぐ。鹿児島市中央部に位置し、周辺には薩摩藩関連の史跡も多い。



校長 上林房一正先生

児童数 338人 学級数 15学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒892-0847 鹿児島県鹿児島市西千石町15-5

TEL 099-226-6285

URL <http://keinet.com/yamashis/>

公開研究会 2010年11月12日(金)

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

課題

「知・徳・体」の面から
「生きる力」を捉え直す

鹿児島市立山下小学校は、2008年度から『生きる力』を幅広く学習指導の開発をテーマに3か年の研究を進めている。テーマ設定の背景には、今日的な課題として「生きる力」の育成が求められていることに加え、同校の子どもが抱える課題があった。上林房一正校長は次のように説明する。

「本校には素直な子どもが多いのですが、問題解決においては、結果を意識するあまり、問題を解く過程の自分自身のよさに気が付いていない子どもが多いように感じています。また、自分なりの考えや思いはもっていても、それを友だちに的確に伝える表現の技能は十分とは言えない状況にありましたので、友だ

図1 山下小学校の「生きる力」の定義

- ◎基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、それらを駆使しながら問題解決を行うことができる思考力・判断力・表現力
- ◎豊かな個性をもち、きまりを守り、多様な体験的な活動を通して他と好ましくかわりながら自分らしさを追究する力
- ◎自分を取り巻くすべての人やものとのかわりを理解し、社会的な存在としての自分の果たすべき役割を自覚しながら正しく行動する力
- ◎健康的な生活習慣や積極的にスポーツに親しむ習慣を身に付け、目標の実現に向けて最後まで粘り強く頑張ることのできるたくましい心や体力

*下線は同校による

ちと意見を述べ合い、互いに思考を錬磨していく場を設けたいと考えました」

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」では全国平均を下回る種目があり、体力的な課題もあった。こうした実態から「生きる力」を知・徳・体の観点で4項目に捉え直した(図1)。

カリキュラムの概要

「学び」を生かす力をつけるためのカリキュラムをつくり実践に反映

「生きる力」を育むために研究の中心に据えているのは、「学び」を生かすための学習指導だ。同校は、「経験や学習によって身に付けたさまざまな『知』を『学び』と捉えている。『学び』を生かす」とは、身に付けた「知」を日常生活や課題解決の場面で必要に応じて活用する、ということだ。「学び」を生かすことと「生きる力」を育む関係を、研究主任の吉元宣博先生は次のように話す。

「『学び』を生かす、つまり活用する力を身に付けることは、本校が目指す『生きる力』の中の『基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、それらを駆使しながら問題解決を行うことができる思考力・判断力・表現力』を育むことにつながります。『生きる力』を付けるためには、『学び』を生かす力を育てることが不可欠だと考えます」

「学び」を生かす子どもを育むための取り組みは、大きく二つある。

一つは、生かすべき「学び」の系統・関連の明確化だ。教科ごとに、この学年では何を教えるのか、それを今後生かす場面はどこにあるのかを整理し、カリキュラムをつくる。

もう一つは、子どもが「学び」を生かすようになるための手立ての充実だ。「学び」を整理し、カリキュラムに反映するだけでは、子どもが「学び」を生かせるようにはならない。カリキュラムづくりと併せて、子どもが



鹿児島市立山下小学校
教務主任 木田博 Kida Hiroshi
「他者との間に共通点を見いだす喜びを伝え、認め合いながら学ぶ子どもを育てたい」



鹿児島市立山下小学校
研究主任 吉元宣博 Yoshimoto Nobuhiko
「誤答の中にも子どもなりの論理がある。一人ひとりの考えに気づき、大切にしたい」



鹿児島市立山下小学校教頭
小正公二 Komasa Koji
「担任の先生を立てながら、教頭の立場で一人ひとりの子どもを手厚く支援したい」



鹿児島市立山下小学校校長
上林房一正 Junho Isaho
「環境が人をつくる。子どもも教師も課題に挑戦したくなる環境をつくってきたい」

「学び」を生かす、すなわち既習事項を生かせるようになるための手立てまで講じているところが、同校の特徴だ。

また、「学び」を生かすことは、知的活動だけでなく、道徳や体育など多様な場面でなされるべきと考え、研究は国語、算数、道徳、体育を中心に進めている。外国語活動についても、10年度には高学年で年間35時間分のカリキュラムを作成して取り組んでいる。

カリキュラムと実践のかかわり

「学び」の系統・関連を明確にし カリキュラムに落とし込む

同校のカリキュラムづくりと、「学び」を生かす子どもを育む手立てについて、算数を例に紹介しよう（実践例はP.13図5参照）。

①「学び」の系統及び関連の整理

同校では、算数における「学び」を、「数量や図形についての知識や技能及び考え方」としている。既習の知識や技能、考え方を新たな問題の解決に活用したり、そのことによって自己の伸びや変容を感じたりする姿が、同校が目指す子どもの姿だ。

しかし、知識や技能、考え方を身に付けるだけでは断片の集まりに過ぎず、「生かす」ことは出来ない、教務主任の木田博先生は説明する。

「分からない問題に出合った時、『これまでに学習した中で使えそうな知識や考え方はないか』と考え、既習内容を想起して結び付ける力があったのはじめて、『学び』を生かせるようになるのです。そうした力は、教科書に沿って教えるだけでは付きにくく、教師が学習内容の系統や関連を十分に理解し、つながりを意識した指導をする必要があります」

そこで、この「学び」を、知識や技能などの「内容」と、問題を解決する際に領域の内容にかかわらず用いることが出来る数学的な見方・考え方や方略などの「方法」の両面から、系統・関連を整理した。

◎「内容」の整理

「数と計算」領域を中心とした、内容面の「学び」の系統図を見てみよう。図2は「数と計算」領域の系統図、図3はその系統図の中から特定の単元を中心に、より具体的な内容も含めて系統を整理したものだ。

図3には、後述する、関連する領域で指導する「考え方」も併記している。例えば、1年生の「繰り下がりのある整数の減法の仕方」では、1年生前半で学ぶ「整数の減法の仕方」で学んだ「数の見方（和）」とつながりがあることが確認できる。また、2～6年生の「整数の加法、減法の仕方（筆算形式）」では、1年生の「10より大きい数」単元の「20までの数」の学習において、「位取りの考え」を身に付けておくことが大切だと分かる。

◎「方法」の整理

図4は、「数と計算」領域の各学年の単元で重視したい「考え方（見方・考え）」をまとめたものだ。算数の指導では、他領域の「見方・考え」が関連することも多いため、「数と計算」に加え、「量と測定」や「図形」など他領域の「見方・考え」も含まれている。

例えば、1年生の「10よりおおいかず」の単元では、「10になることに束をつくる位取りの考え」の指導を重視していることが分かる。図3「学び」の系統図と併せて見れば、これが後の学年でどのような単元に関連しているかも確認できる。

②「学び」を生かすようになるための手立ての工夫

授業などで、子どもが自ら「学び」を生かせるようにさまざまな手立ても講じる。

◎単元設計、1時間の学習過程の工夫

授業の始めに学習を振り返る、既習事項との共通点を考える時間を設けるなど

◎教師の問い掛け、板書の工夫

「これまでに似たような場面はあったかな」などの既習事項を想起させるような発問や、ポイントを把握しやすい板書をする

◎記録する」「整理する」「伝達する」という学習活動の重視

振り返りをしやすいよう、ノートの書き方を指導し、考えを整理する時間を重視する

◎自己の「学び」を振り返る、自己評価活動

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

図2 算数「数と計算」領域の「学び」の系統図（加法・減法の抜粋）

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
<p>加法及び減法の意味</p> <p>加法及び減法の技能 (一位数同士の加減)</p>	<p>加法及び減法の相互関係についての意味</p> <p>加法及び減法の技能 (二位数の加減と筆算形式)</p>	<p>小数の加法及び減法の意味(小数第一位まで)</p> <p>分数の加法及び減法の意味(同分母分数)</p> <p>加法及び減法の技能(四位数までの加減と筆算形式)</p> <p>小数の加法及び減法の技能(小数第一位まで)</p> <p>分数の加法及び減法の意味(同分母分数)</p> <p>加減計算の工夫、()を用いた加法及び減法の技能</p>	<p>和・差の用語の意味</p> <p>概算(和、差)の技能</p> <p>小数の加法及び減法の技能(小数第二位まで)</p> <p>分数の加法及び減法の技能(帯分数を含む)</p>	<p>分数の加法及び減法の意味(異分母分数)</p> <p>分数の加法及び減法の技能(異分母分数)</p>	<p>整数・小数、分数の混ざった加法及び減法の技能</p>

図3 1年生・算数「繰り下がりのある減法」における「学び」の系統図

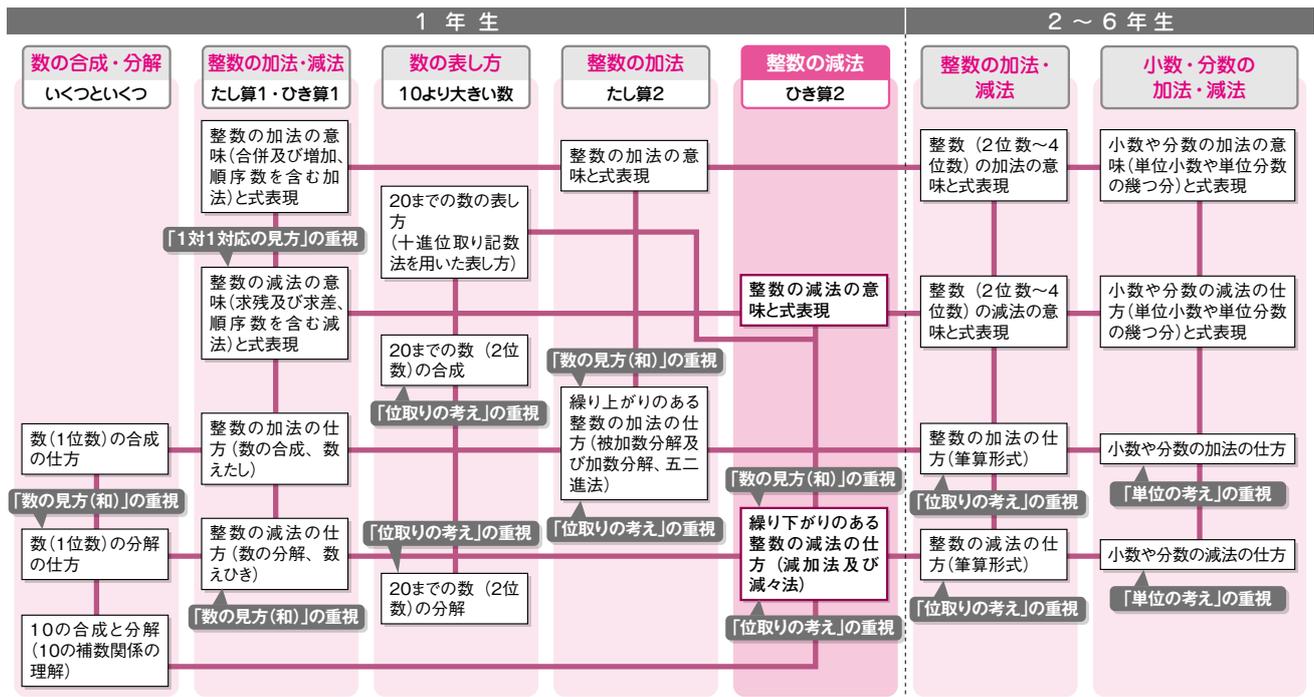


図4 算数「数と計算」領域と他領域との「考え方(見方・考え)」関連表(1年生の抜粋)

単元名	数と計算								量と測定		図形		数量関係	
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	b	c	a	b
10までのかず	○		○		○									○
いくつといくつ	○			○										
なんばんめ	○													
たしざん(1)	○						○							
ひきざん(1)	○				○		○			○				○
10よりおおきいかず								○						

*○は「数と計算」領域で特に重視したい「見方・考え」

*図2～4はすべて同校の資料を基に編集部で作成。図4は、他学年も含めた表全体を、小誌ウェブサイトでご覧いただけます
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (小学校向け)

自分の変容や、「学び」を生かすよさに気が付くように、自己を振り返る活動を重視する

こうした指導により、子どもは自ら「学び」を想起し、課題解決に結び付けられるようになった。10年度は「学び」をより深めることを目指していると、木田先生は話す。

「自分の『学び』と友だちの『学び』を比較したり、関連付けたりしながら自分の『学び』を再構築する力にはまだ課題があります。そこで、10年度は、話し合いや発表によって自分の『学び』を表現し、友だちの『学び』とつなぎながら学ぶ姿勢を育んでいます」

そのために次のような活動に取り組む。

◎自分自身の「学び」を表現する活動

体験から感じ取ったことを、言葉や絵、身体などで表現することなど

◎自分の「学び」と友だちの「学び」とを交流する活動

自分と友だちとの考えとを比較し、互いの共通点や類似・相違点を伝達し合うことなど

◎自分自身の「学び」の再構築を図る活動

友だちの意見や考えを基に、自分の考えを見直してみることなど

研究を活性化させているのが、どの教師も積極的に意見を出せるような校内の雰囲気づくりだ。小正公二教頭は次のように語る。

「常に先生方に声を掛けて、相談に乗ったり支援したりしています。皆が気軽に話し合い、協力して、日々の授業改善に取り組む雰

囲気を大切にしたいと考えています」

成果

友だちの考えとつなげることで「学び」を深め、「学び」を生かす

研究を通じて、まず教師の意識が変化しました。「学習内容の系統や関連を明確にしていなかった頃は、各教師が経験に頼って授業をしていました。それが6年間の学習内容のつながりを理解した上で、『この単元では特に何を教えるべきではないのか』と意識して指導を見直すようになりました」（木田先生）

つながりを意識することは、子どもが「分岐」を防ぐことにも有効だ。子どもが「分からない」「出来ない」時に、教師がどのような内容や方法を例示すればよいかを考えられるようになった。以前は、どの教師も教科書の単元配列に沿って授業を進めていたが、子どもの実態をよく見て、単元の順序を入れ替えたり、課題のある単元を重点的に取り上げたりと、工夫をするようになっていた。

そして何よりも、子どもが自ら「学び」を生かす姿が目立つようになったという。

「これまでに学んだことを生かして、自分で考え、意見を発表することに喜びを感じているようです。すぐに答えを求めず、『一つのことに対して多様な考え方をしてよい』と

いう態度や、『分からない時はAさんの方式を使えばいいよ』という言葉で、自分自身と友だちの『学び』を結び付けて考える姿も見られるようになりました」（吉元先生）

特に算数の授業では多くの意見が交わされ、友だちとのかかわりを通して考えを深める子どもが目立つようになったという。

「10年度の『全国学力・学習状況調査』では活用する力を問うB問題の結果が平均を大きく上回っています。日々の実践が『思考力・判断力・表現力』、ひいては『生きる力』の育成に結び付いていることを実感しています」（上林房校長）

上林房校長が重視する

校長としての役割

子ども一人ひとりが自分の力に応じて十分に力を発揮できる環境を整えることを重視しています。子どもが喜んで登校し、分からなかったことが分かり、出来なかったことができ、感じ取れなかったことが感じ取れる学校をつくりたいと考え、先生方にも協力を呼び掛けています。

毎週日曜日、学校の裏手にある城山に、子どもや先生方、保護者の方などと一緒に登山しています。こうした伝統的な取り組みをはじめとして、「不易」を大切にすると共に、今の時代にふさわしい教育への改善を推進し、子どもに「生きる力」を育みたいと考えています。

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

図5 「学び」の系統や関連を踏まえ、「学び」を生かす手立てを講じている授業例 1年生・算数

単元名：「10よりおおきかず」

授業のねらい 数の相対的な大きさを捉えられるようになるために、「数の場所(位置)は、他の数の並びとの中で確定していくこと」(順序数)を理解できるようにする

授業者 植田龍^{りんと}先生

授業の流れ

- 1** 10、11、12、14、15、18、19の数字カードと、4枚の「はてな(?)」が書かれたカードを黒板に貼り、「はてなカードはどこにおいたらよいか」というめあてを示す。子どもは「？」を数列上に置き、「？」に入る数字を考える
- 2** 何人かの子どもが順番に前に出て、黒板のカードで数字を数列順に並べていく。次に、黒板に逆順にカードを貼り、同様にカードが並べられた後、カードの並べ方を確認する
教師「Aさんが、なぜここにカードを入れたか分かる？」
「数字が1ずつ増えている(減っている)ことを全員で確認」
- 3** 子どもが問題をつくる。1人の子どもが「はてなカード」が1枚含まれる4枚のカードを引き、何人かの子どもが黒板でカードを並べる。その後、全員の子どものそれぞれ手元のカードを用いて、同じ4枚のカードを自分の机の上に好きな順番で並べる
教師「Bさんが11を置いて、ちょっと変だなんて言っていたよ。みんなこれを見て『何か変だな』って思ったんだよね。変じないように並べ替えてください」
子どもはそれぞれが考え、教師は机間指導。その後、10、12、14、16と並べた子どもを指名し、黒板で確認。「2ずつ増えている」ことを確認
- 4** 2問目をつくる。5、10、「？」、20のカードで実施。数人の子どもにより、黒板に「5、10、15、20」と並んだ
教師「Cさん、これどうなっている？」
「前にこういう数え方をしたことはなかったかな？」と問い掛け、「5とび」であることを確認
- 5** 電子黒板を用いて「かずのせん(数直線)」について確認する。1ずつの目盛りの「かずのせん」を示した後、動物が線上を飛んでいく映像を用いて、「2とび」「5とび」での「かずのせん」を示す。最後は、動物が20以上の目盛り(20以上の数の方向)を超えていく
次の授業で20以上の数字を扱うことにつなげる

「学び」を生かすための手立ての工夫



① 授業中は常に子どもから意見を求める。自分の意見と違う発言に対しては「ほかにもあります」と言ってから発言。友だちの考えを否定せず、子どもが意見を言いやすい雰囲気をつくる

② 子どもが1人で考える時間を確保し、ノートに表現させる。その上で、友だちの考え方を確認できるように、教師が「〇〇さんがなぜこう考えたか分かる?」「〇〇さんはこう言っていたよ」などと言って全体に広げる



③ それぞれの子どもの考えを名前と共に板書し、共有する



④ 電子黒板を用いて本時で学んだことをまとめると共に、次の学習内容も示し、学んだことにつながりを意識させる。電子黒板は全学級の教室にあり、どの教科の授業でも活用している

「学び」の系統と関連のポイント

- ① 前時までに学んだ「なんばんめ」の数え方や、「2とび」「5とび」の数え方を生かす。
- ② 「かずのせん」は、「長さ」や「かさ」などの量(2年生)を表したり、小数や分数などの大きさ(3年生)を表したりするのに用いる。本時における数の場所(位置)を確定する学習が、数の目盛りを確定する以降の学習へとつながっていく。
- ③ 「分からない(見えない)部分(値)を求める時には、与えられた条件からきまりを見つめる」という考え方に気付くようにした。これは、1年生におけるたし算やひき算の規則性、2年生におけるかけ算の規則性、4年生における「ともなって変わる量」、5年生における比例、6年生における「いろいろな立体」、中学校の「図形の性質と調べ方」などにおいても、「分からない(見えない)部分(値)を求める時には、与えられた条件からきまりを見つめる」という子どもの「学び」を生かす姿へつながっていくものである。

「ヘキサゴンプラン」を 全教師の日々の教育活動の柱に

栃木県 宇都宮市立上河内西小学校

宇都宮市立上河内西小学校のカリキュラムの中心にあるのが「ヘキサゴンプラン」だ。目指す児童像の実現に向け、あらゆる教育活動の中からどこに重点を置くかを定めたプランである。全学年の教師が課題や目標を共有し、日々のすべての活動が目標へ向かって組み込まれている。

課題

- 外に向けて自分を表現する力が弱かった
- 自分から進んで学ぶ積極性に乏しかった
- 思いやりの心を備えた言動が足りなかった

カリキュラムの概要

- 「目指す児童像」に向けて教育の重点を定めた「ヘキサゴンプラン」を、教科指導や日常的な実践に具体的に落とし込んでいく

カリキュラムづくりの流れ

- 校長が「ヘキサゴンプラン」を策定、教職員全員で共有
- より具体的な「教育課程自校化プラン」を教職員全員でつくる
- 子どもの良い面を更に伸ばすため、良い指導は継続して残していく

カリキュラムと実践のかかわり

- 教科学習だけでなく、行事や日常生活でも「ヘキサゴンプラン」を踏まえたねらいの達成を目指す
- 実践案は教師全員で意見を出し合い、検討する
- 教師の負担軽減に向け、「1人1アイデア」を導入

成果

- ねらいに向けた小さな実践の積み重ねにより、児童に思いやりの心などが育まれている
- 教師間の意識の共有により学校の組織力が向上した
- 教師の多忙感を軽減しながら、ねらいを達成できるようになった

S c h o o l D a t a

◎1967（昭和42）年開校。羽黒山の麓、豊かな自然に囲まれた田園地帯にある。食育に注力するほか、2007、09年度には栃木県「健康推進学校表彰最優秀校」に選ばれた。



校長 刀川啓一先生

児童数 153人 学級数 6学級

所在地 〒321-0412 栃木県宇都宮市関白町471

TEL 028-674-2011

URL <http://www.ueis.ed.jp/school/kamikawachi-w/>

公開研究会 未定

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

課題とカリキュラムの概要

「目指す児童像」を あらゆる教育活動で意識する

穏やかな田園風景に包まれる宇都宮市立上河内西小学校は、全学年が単学級の小規模校だ。6年間を通して固定された人間関係の中で過ごすことの長所と短所を、刀川啓一校長は次のように話す。

「気心の知れた友だちと共に学び、深い関係を築けることは良いことだと思います。その反面、外に向けて積極的に自分を表現する力が育ちにくい環境にあります。また、少数ですが、友だちを傷つけてしまうような言動をする子どもがいることにも、課題を感じていました」

学習面では、教師の指示を素直に聞き、課題を出せばまじめに取り組む子どもが多い。しかし、忍耐強く考える力や、自ら進んで学ぶ意欲、失敗を恐れずにチャレンジする積極性が乏しいことに、多くの教師は「何とかしたい」という思いを抱いていた。

こうした子どもの実態を出発点として「目指す児童像」を掲げ、すべての教育活動を通して実現させようとしているのが、同校のカリキュラムの特色だ。中心となるのは「ヘキサゴンプラン（2010年度の学校教育の重点）」である（P.17図1）。

「目指す児童像」には「ひとりで」「仲良く」「たくましく」の三つの大項目が掲げられ、それぞれ具体的に付けた力や明文化されている。これらの力は、毎年、子どもの実態を踏まえて見直している。例えば、09年度

は国語科を中心に表現力を高める指導に力を入れていたが、指導の過程で、表現力の土台として学びへの主体性を育てる必要性を実感した。そのため、10年度は、「ひとりで」の中に「自ら進んで学べる子」という項目を盛り込んだ。「目指す児童像」を基に「学校経営方針」も毎年再考している。

「ヘキサゴンプラン」には六つのプランがある。「ひとりで」はプラン1・2、「仲良く」はプラン3・4、「たくましく」はプラン5が対応している。プラン6は、「目指す児童像」ではなく、「学校経営方針」の中の「開かれた学校づくりの推進」に対応した内容になっている。例えば、「ひとりで」に示した力を付けるための教育活動として、プラン1「確かな学力の定着・向上」と、プラン2「読書活動の推進」が充てられ、それぞれ教育内容や工夫のポイントが書かれている。

「ヘキサゴンプラン」の下には「教育課程自校化プラン」がある（P.17図1下部）。学習指導要領の重要なポイントを確認する作業を経て、「ヘキサゴンプラン」を各教科や領域等に具体的に落とし込んだものだ。

教師は、「ヘキサゴンプラン」で大きな方

向性を、「教育課程自校化プラン」でより具体的な指導内容を共有している。

カリキュラムづくりの流れ

教育の柱を共有し 教師全員で計画を作成

毎年、「ヘキサゴンプラン」は刀川校長が中心となり、副校長と相談しながら作成し、「教育課程自校化プラン」は教師全員で教科や領域ごとに分担してつくる。いずれも入学式までには完成させ、年度当初から実践する。「次年度に異動する可能性があっても、全員で作成を分担しています。子どもの実態を



宇都宮市立上河内西小学校
学習指導主任、3学年担任。「子どもをよく見て、自分の居場所があって楽しいと感じられる学校をつくりたい」



宇都宮市立上河内西小学校
教務主任。「子どもを多角的に見て必要な指導を見極める。教務主任としては、労力に対する効果を意識していきたい」



宇都宮市立上河内西小学校校長
刀川啓一 Tachikawa Keiichi
「率先垂範を心掛け、先生方に具体的に分かりやすいビジョンを示していきたい」

把握した教師が、新たに赴任してくる教師に本校の取り組みを引き継ぐという意味を込めて、次年度のプランをつくってもらっています」(刀川校長)

教師全員で「教育課程自校化プラン」をつくることにも大きな意味がある。教務主任の福田知香子先生は次のように説明する。

「『教育課程自校化プラン』をつくるためには、『ヘキサゴンプラン』を相当読み込む必要があります。その過程を経ることで、本校で重点を置く教育活動が何かを共有できます。また、他の教師がつくったプランに従うだけでは、意識は高まりません。自分がつくるからこそ、担当した教科や領域以外もしっかり読もうという気持ちになるのです」

「教育課程自校化プラン」の作成により、学校の教育の重点に沿った授業のイメージを持つことが出来る。例えば、「ヘキサゴンプラン」1の「確かな学力の定着・向上」のために、国語では「話す」「聞く」についての指導を重視すること、授業の見直しと共に、朝の時間を活用することが示されている。こうして、学年間で重点化すべき内容が統一され、指導の系統性が保たれる。

「学校組織として同じ方向に動くには、皆が教育の柱を共有し、どのような努力をすればよいかを理解する必要があります。柱はなるべく簡潔にして、それがどの指導につながるのかが具体的に見えやすくなるように心掛

けています」(刀川校長)

例えば、毎年4月に開くクラスごとの保護者会では、担任が保護者に対して、学校の経営方針や学習の実態、その年度に重点を置く教育活動などについて説明する。その際、教師が「ヘキサゴンプラン」を通して「開かれた学校づくりの推進」のねらいを正しく理解しているからこそ、保護者に学校の教育活動を説明し、協力をお願いなども出来る。

「日々の実践において、全校共通の柱は絶対が必要です。たとえ実践は同じでも、その意味や位置付けをしっかりと理解していない教師がいた場合、教師によって説明の仕方などが異なってしまう」(福田先生)

教育の重点を決める上では、指導の継続性も重視している。その方針は、「目指す児童像」に色分けされていることに表れている。加筆・修正した箇所が年度ごとに異なる色で書かれており、4年前までの変更点がさかのぼって分かるようになっていた。

「教育では、新しいものが何でも良いとは言えません。子どもの良さを伸ばしてきた指導は継続した上で、課題に対しては新しい指導を積極的に取り入れたいと思います。そのため、どの指導を継承しているのか、どの年度から新たな指導に重点を置いているのかを、視覚的に分かりやすくしています」(刀川校長)

カリキュラムと実践のかかわり

学校行事や日常生活を通じて 課題にアプローチ

「ヘキサゴンプラン」は、教科学習だけでなく、学校行事や清掃、昼休みなど、あらゆる教育活動に反映されている。近年では、特に重視するプラン4「心をはぐくむ活動の充実」の実現のために、学年縦割りの活動を充実させている。

「本校には元々、優しい子どもが多いため、その良さを更に伸ばし、学校全体の良さになりたいと考えました。また、乱暴な言動が見られる一部の子どもも十分に育みたいというねらいもあります。児童会や遠足、運動会、清掃、昼休みの遊びなどに縦割り班を取り入れ、異年齢交流を通して共に助け合う心の育成を目指しています」(刀川校長)

更に、授業参観では全学級で「命」や「家族愛」をテーマとした道徳の授業を行った。保護者や地域に実践を公開すると共に、このテーマは特に保護者などの考えを聞くことが、子どもの「命」や「家族愛」への考えを深めることになるからだ。授業参観という場も、目指す教育へ向けて最大限に活用しているのだ。

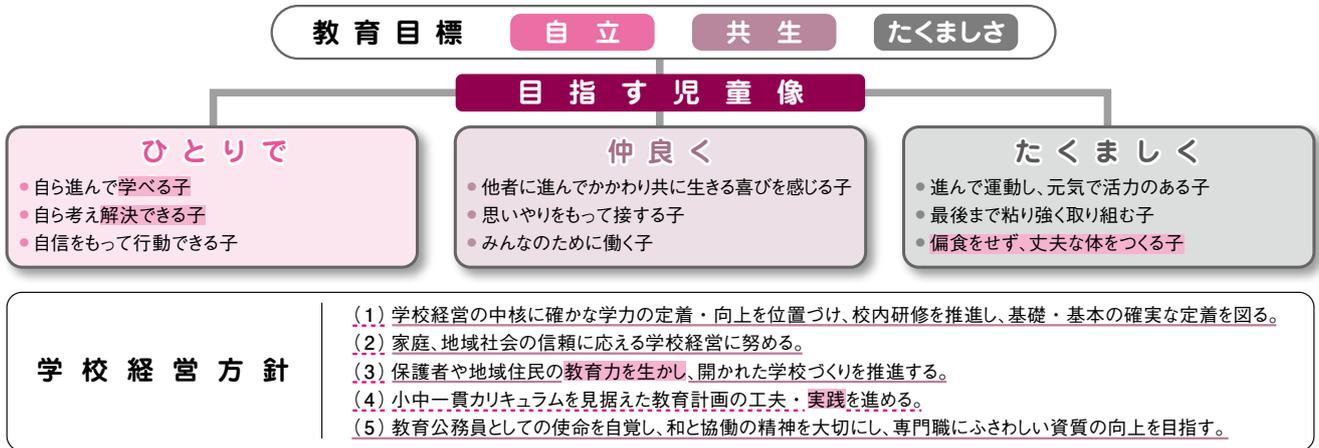
学校行事や特別活動の計画は、「目指す児童像」に迫るため、「ヘキサゴンプラン」を

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

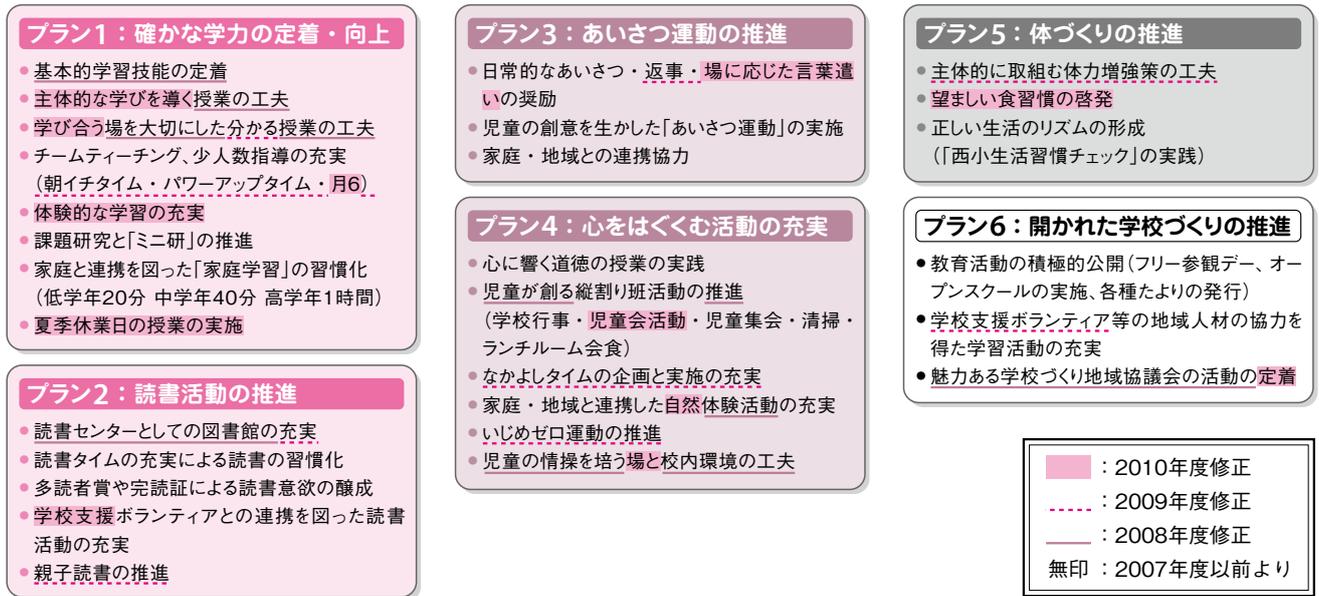
図1

平成22年度 カリキュラム全体像

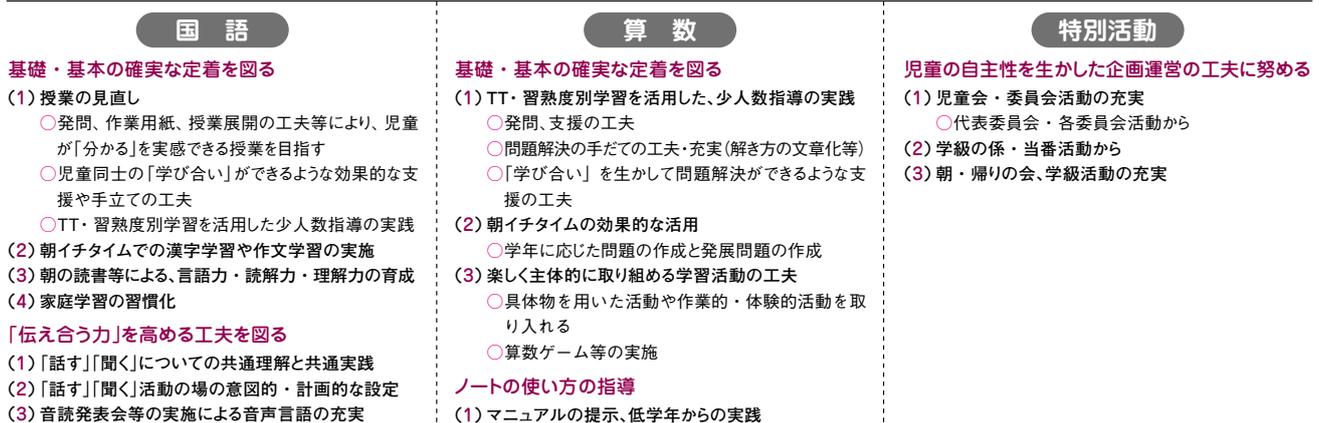
学校経営全体構想(抜粋)



本年度の学校教育の重点(ヘキサゴンプラン)



教育課程自校化プラン(抜粋)



*同校の資料を基に編集部で作成。「学校経営全体構想」の実物では修正した年度により文字の色が異なるが、本図ではアミ掛けや下線で示している

踏まえて考えられ、職員会議で提案される。それに対し、刀川校長を含めた全教師が「このようなねらいもあってもよいのでは」などと意見を出し合い、計画を練り上げていく。例えば、運動会は毎年、前年度の反省を踏まえて種目の数や内容を検討し直す。学習指導主任の石川晴美先生は次のように話す。

「09年度の体力テストの結果、ソフトボール投げが弱かったため、10年度の運動会では、ボールを使った種目を取り入れました」

教師全員で学校を運営しているという意識があるため、職員会議の意見交換も活発だ。

「一人の意見は全員の意見」という雰囲気があり、意見をよく聞かれます。若手の先生も自分の意見が生かされていくため、前向きな気持ちで活動に取り組めます」（石川先生）

負担を減らしながら ねらいを達成する「経営統合」

同校では伝統的に学校行事に力を入れており、それが教師を多忙化させている面もあると、刀川校長は話す。

「これ以上、何かが加わったら子どもも教師もパンクしてしまう」と感じることもあるのも事実です。それでも、一番に考えるべきは子どものことで、活動にはそれぞれねらいがありますから、『忙しい』という理由で取りやめて、子どもに力をつけるのを諦めたことはありません。何かやり方を変えなければな

図2 「経営統合(負担軽減に向けた1人1アイデア)」による改善例

「音読発表会」の実施形態の変更

音読発表会のねらい 外に向けて自分を表現する力が弱いという課題の克服

改善前

全校児童や教師が体育館に集まって実施。大勢の聞き手を前にした発表のため、事前練習に多くの時間を費やしていた。

課題

緊張感のある場で発表をする良さはあったが、当日や事前練習に要する時間が授業時数を圧迫していた。

石川先生が職員会議で改善案を提案

改善後

低・中・高学年のブロックに分かれ、廊下のオープンスペースを使った発表会に変更。授業で学んだことをそのまま発表するようにして、練習時間を減らした。

成果

練習時間が短縮されて授業時数に余裕が生じた。三つのブロックに分けたことで、発表者と聞き手の距離が近づいて過度に緊張しない状態で参加できるようになり、互いの頑張りをつたえ合う温かい雰囲気生まれた。

成果や反省を踏まえた今後の展望

更なる改善案

今回は1年生と6年生など年齢の離れた学年でブロックを構成し、「1年生にアドバイスをする」「6年生の発表の上手さを感じる」といった機会として心の交流を促す場にもしたい。

その他の改善例 「交通安全教室」の実施形態の変更

校庭に作った模擬道路で実施していた「交通安全教室」を、安全に留意した上で、周辺の道路で行うことにした。校庭にラインを引くなどの準備時間が不要になったほか、実際の道路で行うことで訓練の効果も高まった。

らない状態ですが、すべてを変えるのは現実的ではありません。ねらいを達成しながらスリム化を図りたいと考えたのです」

10年度は刀川校長の提案で、「経営統合」として教師が一人一つずつ、負担を軽減するアイデアを出している。これにより、石川先生が提案した「音読発表会」をはじめ、いくつもの活動が見直された(図2)。

6年間の成長を見据えた指導も、同校の特徴といえるだろう。月1回、教師全員が参加する「児童指導連絡会」では、子どもの実態を話し合い、全児童の様子を共有する。

「上の学年に足りないと思われることがあれば、下の学年の指導を改善するなど、縦のつながりを意識した教育が出来ます」(福田先生)

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

小規模校で教師数が少ないということもあり、教師は互いに「支え合う」という意識を強く持っている。例えば、学習の定着に向けて昼休みに行っているプリント学習の時間には、担任以外の教師もクラスに入って指導し、刀川校長も添削を手伝う。

どの教師も児童全員の名前を覚え、気になる子どもに対して方針を共有してかわわっていることなども、効果的な指導につながっている。

成果

日々の実践の積み重ねで 思いやりの気持ちが育まれる

こうしたカリキュラムによる学校運営は、どのような成果を生み出しているのか。

まず、一つのねらいに対して教科学習や特別活動などで多角的に迫ることにより、目指す力が子どもの中に育まれていることが挙げられる。

「一例ですが、縦割り班で行う登山遠足では、教師の指導がなくても、上級生が下級生の荷物を持ったり、足場の悪い場所で手を引いたり、自然と面倒を見る場面が多々見られました。子どもたちの中にそのような気持ちが育っていたのだとうれしくなりました。これは、縦割り班を日常の場面に取り入れる、

道徳の授業に重点を置くなど、小さな積み重ねが表れたものだと思います」（石川先生）

その背景にあるのは、教師が子どもの課題や教育のねらいを共有し、一丸となって目標の達成を目指す体制が出来たことだ。「皆が同じ方向を向かなければ、学校としての組織力は高まらない」と刀川校長は強調する。

更に、どの教師もねらいを意識して計画を練るため、反省点や改善点も明確になる。ねらいから計画を作成、見直しというサイクルを繰り返すことで、授業力や企画力、保護者への説明力など「個人力」が高まり、その集合として「学校力」も向上しているという。

教師の多忙感も軽減されている。09年度、刀川校長は「目的を見定めた上で、多忙にならないように工夫しましょう」と教師に話したが、それだけではなかなか改善に結びつかなかった。そこで10年度は、「一人一つのアイデアを」と具体的な施策を呼び掛けたところ、実際の改善につながった。

「疑問を持ちながら取り組んでいたことが改善されるのは良いことです。実態に合ったものになれば、時間や労力が軽減されるだけでなく、精神的なストレスもなくなり、気持ち良く子どもと向き合えます」（福田先生）

職員室では、雑談形式で気軽に相談でき、一人で悩むことはないという同校。子どもの実態を見つめた全員での取り組みはこれからも続けられていく。

刀川校長が重視する

校長としての役割

児童の持つ良さを伸ばしていくことを大切にしています。本校の子どもは、素直で優しいところが何よりの長所です。人権教育や心の教育を継続的に大切にして、その良さを更に伸ばしていくことで、子どもの自己存在感を高めたいと思っています。卒業生が人権教育で学んだことを表現した作品は、本校の思いや願いをよく表しています。これからも玄関の目立つ場所に飾り続けるつもりです。

また、常に勉強を続けることも、強く意識して自らに課しています。民間経営の考え方も含め、参考に出来るものは何でも取り入れながら、より良い学校経営を模索していきたいと思っています。



写真 卒業生が人権教育の学びの成果を表した作品。作品を作ることには課されていなかったが、当時の6年生がこのような気持ちになったことがとてもうれしかったと刀川校長は話す。心をはぐくむ教育に力を入れる同校の特色を表すものとして玄関に飾られている

「視覚的カリキュラム表」で見通しを共有しねらいへ向かう

新潟県 上越市立春日小学校

上越市立春日小学校は、全教科・領域等の年間カリキュラムの一覧表「視覚的カリキュラム表」を学年ごとにつくっている。ランドデザインに示された目標を反映させたカリキュラムをつくり、実践を振り返ることで、子どもに付けたい力を学校全体で育んでいる。

課題

- 自分で考えて意見をまとめ、相手に伝えられない子どもがいた
- 感情を制御できず、相手を傷付けるようなことを言ってしまう子どもも見られた

カリキュラムの概要

- 「二つの力と二つの心」の育成が示されたランドデザインによって教育の方向性を明確化
- ランドデザインを、日々の教育活動に落とし込んだ「視覚的カリキュラム表」を作成し、年間の見通しや教科間のかかわりを意識しながら実践・修正を繰り返す

カリキュラムづくりの流れ

- 4月に学年団で話し合って「視覚的カリキュラム表」を作成。その後は、実践の中で出てきた課題などをその都度反映する
- 長期休業中の全体研修で前学期を振り返り、カリキュラムを修正
- 他学年の実践を全学年で共有しながら、学校として目指す方向を研修の場で確認する

成果

- ランドデザインがカリキュラムに反映され、授業でもそれを意識して日々の教育活動が行われるようになった
- 上記により、子どもが自分の考えを友だちに伝えたり、友だちの話に耳を傾けたりする姿、友だちや地域を思いやる姿が見られるようになった

S c h o o l D a t a

◎1874（明治7）年開校。子どものコミュニケーション能力を伸ばす教育活動を続けており、2007年度から2年間、文部科学省指定の「伝え合う力を養う調査研究事業」推進校に選定された。



校長 西山義則先生

児童数 786人 学級数 29学級（うち特別支援学級6）

所在地 〒943-0802 新潟県上越市大豆1-13-11

TEL 025-523-3859

URL <http://www.kasuga-e.jorne.ed.jp/>

公開研究会 2010年11月19日（金）

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

課題とカリキュラムの位置付け

グランドデザインを教育活動に 反映させたカリキュラムを作成

戦国武将上杉謙信にまつわる史跡に囲まれた上越市立春日小学校は、全校児童数786人の大規模校だ。1980年代以降、宅地化進行による地域人口の増加に伴い、児童数も増加した。地域の人間関係は希薄化していき、子どものコミュニケーション力の低下も感じられるようになったという。西山義則校長は、子どもの様子を次のように説明する。

「自分の考えを持ってなかつたり、思いを相手に伝えられなかつたりする子どもがいました。また、感情を制御できず、相手を傷付けるようなことを言ってしまう子どもも見られ、わずかなことが原因で子ども同士のトラブルにつながってしまうこともありました」

こうした課題の解決を目指し、同校は2008年度、学校経営のグランドデザインを作成した際、「考え追求する力」「伝え合う力」の二つの力と、「思いやる心」「愛する心」の二つの心の育成を目標に定めた。子どもの自主性と自律性を高め、社会性を身に付けさせようというねらいがあった。

「グランドデザインによって、学校が目指す教育の方向性を先生方にはつきり示すことが出来ました。しかし、示すだけでは教育活

動での実践は難しく、グランドデザインは『絵に描いた餅』になってしまおうでしょう。全教師がその理念を意識し、教科学習をはじめ、すべての教育活動に盛り込んでいけるよう、グランドデザインを反映させた『視覚的カリキュラム表』をつくっています」（西山校長）

新崎俊博教頭は、カリキュラムは子どもの実態と向き合っていくものだと話す。

「授業で重点を置く内容は、子どもの個性や実態によって異なります。当然、カリキュラムもそれに対応させ、重点を置く単元に充てる時間を長くしたり、教科と教科を関連付けて教えられるよう、時期を変更したりといった工夫が必要です。また、そうしなければ、学校として重視する力を効果的に伸ばせません。本校では学年団を中心にカリキュラムを作成しますが、つくっただけで満足するのではなく、子どもと接する中で気付いた課題をどう解決するかを考えながら、絶えず話し合って修正しています」

カリキュラムの概要

全教科・領域の計画が見える 「視覚的カリキュラム表」

「視覚的カリキュラム表」は、全教科・領域等の年間カリキュラムを学年ごとに一覧表にしたものだ（P.23図1）。上越市教育委

員会（以下、市教委）と上越市立学校が連携して進める「上越カリキュラム」（*）の取り組みの一つで、市教委がベースとなるカリキュラム表を作成して全校に配布し、各校はそれを自校の教育活動に合わせてアレンジしている。作業が容易にできるように、カリキュラム表は表計算ソフトでつくられている。カリキュラム表の横軸は時間で、4月から3月までそれぞれの枠があり、体育祭や宿泊体験などの行事を入力する。縦軸は教科で、一教科一段に、内容、時数が単元ごとに書かれる。特徴は次のようにまとめられる。

①年間の見通しを立てやすい

年間の全教科・領域等のカリキュラムが一目で分かり、見通しを立てやすいため、どの



上越市立春日小学校校長
西山義則 Nishiyama Yoshinori
「子どもの実態に合わせて学校を変えていきたい。そのためには、教師同士が自由に意見を述べ合うことが大切」



上越市立春日小学校教頭
新崎俊博 Shinazaki Toshhiro
「グランドデザインを基に、子ども一人ひとりを尊重した指導が出来るよう、担任と話し合っていきたい」



上越市立春日小学校
教務主任
戸田正明 Toda Masahiro
「子ども一人ひとりの行動や様子を見つめ、気持ちを思いやり、教師として何が出来るかを考えたい」

*「上越カリキュラム」の詳細は、上越市教育委員会学校教育課のウェブサイトからご覧ください

時期にどの内容を扱うのかが把握しやすく、計画的な指導をしやすくなる。

②重点を置く教科を共有できる

教科の並び順は、自由に組み替えられる。重視する教科を最上段や中央など目立つところに配置したり、関連する教科をそばに置いたり、必要に応じて動かせる。教科ごとの高さを広げることも出来、どの教科に重点を置いているかが明確になる。

「二つの力と二つの心の育成」を反映し、多くの学年が道徳、学級活動を重視しており、関連付けられるような近い位置に置いている。

③教科間の関連を意識しやすい

カリキュラム表は、「伝え合う」「追求」などの重視する項目を色分けして表示できる。同じ内容を扱う単元は同じ色で囲む。他教科でも、関連する単元同士を同じ色の矢印でつないだり、同じ色の下線を引いたりも出来る。重視する項目が教科間でどう関連するかを目立たせられるため、教科を横断した取り組みを進めやすい。

重視する項目は各校で設定でき、学校と上越市の教育方針を意識した授業づくりに取り組める。春日小学校は七項目を設けている。五つが「伝え合う」「追求」「思いやる」「地域」「人権同和」と、同校のブランドデザインを反映したものであり、他の二つは、上越市として重視する「上越学習」「(新学習指導要領への)移行措置」となっている。

④時数管理がしやすい

教科の各段は単元ごとに区切られ、その幅割合で決まっている。時数を増減させれば、それに応じて幅も自動的に変わる。教務主任の戸田正明先生は、時数管理がしやすくなったと話す。

「単元ごとの割り当て時数は、カリキュラムをつくる時に設定します。ところが、重視する単元も、重視する度合いも、子どもの様子によって変わってきます。重視する単元には時間をかけて取り組みますが、総時数は限られているため、ほかの単元との調整が必要です。『視覚的カリキュラム表』では、一つの単元と年間総時数との関係を目で確認できるので、時数調整もしやすく、残りの時数を把握してカリキュラムを作成できます」

カリキュラムづくりの流れ

話し合いで課題を明確にし 長期休業中にカリキュラムを修正

「視覚的カリキュラム表」は、毎年4月に市教委が配布する表計算ソフトのデータを基に、学年団が作成する。基となるカリキュラムは、各教科とも教科書の配列通りに単元が並んでいる。春日小学校はこれを並べ替えて独自のカリキュラムにする。道徳、「総合的

な学習の時間」、学級活動のカリキュラムは、学校・学年で重視する教育内容を反映させ、他教科と関連付けながら、すべて自作する。

「学年団は、ブランドデザインの示す方向に沿って子どもの力を付けられるよう単元の配置を工夫し、効果的な教科横断の授業を目指して議論します。カリキュラム表を見ながら話し合うため、出されるアイデアも具体的ですし、この過程を通じて学年で大切にすべき点を明確に共有できます」(西山校長)

4月中には各学年の「視覚的カリキュラム表」がつけられるが、これで完成ではない。戸田先生は、必要に応じて修正すると話す。

「子どもの様子を見て、カリキュラムが合わなければどう変えればよいかを考えることが大切です。このことを、カリキュラムの作成以上に重視しています。週1回の学年会議では、必ずカリキュラム表を見ながら授業の反省点などを話し合います」

他学年の学年団が意見を交換する機会も多く設けている。各学年のカリキュラムづくりやその実践、成果を学校全体で共有するためだ。実践を発表し合うことで、自学年の良さを改めて認識する機会になり、他学年の取り組みから多くの刺激やヒントを得ることも出来る。4月末の職員会議では学年主任が自学年のカリキュラムの特徴やねらいを発表し、夏休みと冬休みには全学年で研修を行う。カリキュラム見直しの大きな機会となるの

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

図1 「視覚的カリキュラム表」6年生1学期の例

行事等	4月		5月		6月		7月		時数		
	1年生を迎える会		体育祭		6年宿泊体験		5年林間学校				
国語	続けてみよう ー本に親しみ、自分と対話しよう 「カレーライス」 漢字の形と音・意味		二文章を読んで、自分の 考えをもとう 生き物はつながりの中に		今も昔も 狂言柿山伏 柿山伏について 短歌・俳句の世界		三 相手や目的に合わせて書こう ガイドブックを作ろう／よりよい文章に 漢字の広場② 学級討論会をしよう		読書の世界を深めよう 森へ 本は友達 漢字の広場③		140
社会	わたしたちの地域の歴史 米づくりのむらから古墳のくにへ		聖武天皇と奈良の大仏		源頼朝と鎌倉幕府		3人の武将と全国統一		郷土の武将 上杉謙信		100
のびやか	見直そうふるさと春日を 佐渡で活躍する人々を調べよう		佐渡での感動を 発信しよう		佐渡との出会いから 感じよう		ふるさと祭り謙信公祭に参加しよう 謙信公祭実行委員さんの講話 謙信公学習(4時間)		探ろう 春日に伝わる「謙信公スピリット」		45
道徳	せんばいの心を受け継いで(愛校心) 江戸しぐさ(礼儀) ○幸せをおくるリーダーに (役割と責任の自覚)		「イチローの夢」ドキュメンタリーDVD(自作資料)(思慮・反省・節度・節制) 義足の聖火ランナー(国際理解・親善)		修学旅行の夜 自由・規律) ○生きるIII「人権の歴史」(生命尊重) ○言葉のおくりもの(友情・信頼、助け合い) ○手品師(誠実・明朗)		○かけがえのない地球(自然愛・環境保全) 土石流の中で救われた命(尊敬・感謝) 白旗の少女(国際理解・親善)				35
学級活動	○最高学年のスタート ○学級の組織作り ○学校生活をリードしよう		○元気にあいさつ(SSE) ○体育祭を成功させよう ○大人に近づく不安や悩み		○思い出に残る宿泊体験学習にしよう(2) ○じょうぶな歯にしよう ○相手の話を上手に聞こう(SSE)		○1学期を振り返ろう ○あたたかいメッセージを伝え合おう(SSE) ○楽しい夏休みにするために				35
家庭	生活時間を見直してみよう		毎日の食事から「上越の食」を見つめる ～上越の米(みそ)文化を味わってみませんか～		1 どんな食べ物を食べているのかな 2 ごはんのみそをしよう 3 おかずの必要性を考えよう		つくろう! さわやか生活		1 暑い季節を気持ちよく過ごそう 2 衣服の着方を考えよう 3 衣服の手入れをしよう 4 生活に役立つ物をつくろう		55
図工	思いを広げて 色を選んで		わたしの町 身近なものを見つめて		地球アート 光と風で						50
体育	体ほぐしの運動 短距離走・リレー、ハードル走、走り高跳び		体ほぐしの運動		病気の予防		クロール、平泳ぎ				90
外国語	Lesson1 今日はどんな日(英語ノートL3)		Lesson2 いろいろな数(英語ノートL7)		Lesson3 トレジャーハンティングをしよう(英語ノートL5)		Lesson4 文房具屋になろう				25
算数	4 いろいろな立体 ●正方形重ねゲーム 1 倍数と約数 2 積や商の見積もり		3 分数 ○仮分数や帯分数の計算		6 単位量当たりの大きさ		○文字と式				175
理科	●地球と生き物のくらし 1 ものの燃えかたと空気		2 動物のからだのはたらき		3 植物のからだのはたらき		○私の研究 ○私の研究		4 生き物のくらしとかんきょう		105
音楽	☆ふしの重なり合いを味わおう。 ●つばさをください ●思い出のメロディー		◇おぼろ月夜(共) ●ラバースコンチェルト		☆世界の音楽に親しもう。 ◎世界の国々の音楽(鑑) ●こげよマイケル ●アンデスの祭り		◇われは海の子(共)		☆いろいろなひびきを味わおう。 ◎小犬のワルツ 他6曲(鑑) ●星空はいつも●風を切って		50
金管	心を一つにドリーム金管										15

カリキュラム表の最上段に、春日小学校が重視する7項目が表示されている。線で囲っている部分は、「伝え合う」「追求」の対応を示したもので、実物は、単元を囲う線はすべて実線であり、色だけが異なるが、本図では「追求」に対応する線を破線で示している。「のびやか」の活動を国語の授業と関連付けたり、学級活動と関連付けたりしていることが分かる。他の項目も同様に色付けされ、重点項目と教科等の単元・内容との関連を一目で把握できる

*同校の資料を基に編集部で作成。「視覚的カリキュラム表」は春日小学校のウェブサイトにて6年生の全体と全学年分をご覧いただけます。<http://www.kasuga-e.jorne.ed.jp/>

は、夏休みの研修だ。この研修では、各学年の1学期の実践を振り返り、ねらいに対して身に付けられた力や課題を明らかにしつつ、2学期以降のカリキュラムについて話し合う。10年度は、8月第1週に、午前中は教科指導での取り組みを検討する「授業実践交流会」、午後は生活科や「のびやか」（総合的な学習の時間）での取り組みを振り返る「生活・のびやか実践交流」を行った（図2）。話し合いに管理職が参加するのも、特徴の一つだ。

「担任は、学級の子どもに意識が集中するあまり、短期的な視点に偏りがちです。管理職の役割は、6年間を通してグラウンドデザインに掲げた『二つの力と二つの心』を伸ばせているかを確認し、課題がどこにあるのかを明らかにして全員で共有することです。学級単位で『こういう力を付けたい』と考えていることを、学校単位で考えていけるよう、導くことが大切だと思います」（西山校長）

学年団は研修での検討を反映したカリキュラムをつくり、夏休み最終週の職員会議で学年主任が発表する。

「例年、大きく変わるののは、道徳や『総合的な学習の時間』、学級活動です。どのような力を伸ばすために変更したのかを知るために、学年主任には、変えたねらいも説明してもらいます。一方、あまり修正しない教科もあります。それはあくまでも結果です。重

要なのは、全教師がグラウンドデザインを再確認し、カリキュラムと向き合って話し合う過程にあると考えています」（新崎教頭）

同校では、1学期と2学期に、保護者に教育活動に関するアンケート調査をしており、その結果もカリキュラムの修正に反映させる。

「カリキュラムは、いわば教育活動の設計図です。教育活動への評価は、カリキュラムへの評価と言っても過言ではなく、その改善こそが大切です。実践をしてみても、力が付かなかったなら、正直にそれを認めた上で、どこが良くなかったのかを考える。そのような姿勢を持続したいと思います」（戸田先生）

成果

考えを伝える力や 他者への思いやりが生まれる

夏休みの研修では、多くの教師から「6年間を見通して考えることは大切だと改めて思った」という声が聞かれた。「付けたい力を年度末になって急に付けようとしても無理がある。最初からの見通しが必要」という西山校長の考えが確実に浸透してきている。

グラウンドデザインに対する意識も高まっているという。

「管理職の声掛けもあり、学年団の話し合いでは、常にグラウンドデザインに立ち戻って

カリキュラムをつくり、修正しようとしています。それは授業にも生かされ、地域を散策した時、国語の教科書に載っていたタチツボスミレを見付ける活動を取り入れたり、米作りの体験に合わせて道徳で勤労について学ぶなど、『総合的な学習の時間』の内容と他教科の内容を結び付けた取り組みが増えていきます。また、単に体験するだけでなく、感想を友だちの前で発表する機会を設けており、『二つの力と二つの心』を伸ばそうという意識は全学年の授業に見られます」（戸田先生）

学校全体でこのような日々の取り組みを続けた結果、子どもの様子が変化してきた。

「多くの子どもが落ち着いて授業を受けられるようになり、自分の考えをまとめて発言できるようになってきました。意見が友だちと異なる場合には友だちの考えを聞いた上で、自分がなぜその意見を持ったのかを、相手に分かりやすく説明する力も付いてきています」（新崎教頭）

戸田先生は、郷土愛や他者への思いやりも育まれていると話す。

「生活科や『のびやか』で上越市について学んだことにより、多くの子どもがその良さや魅力に気付きました。地域で働く人たちへの感謝に加えて、友だちを大切に作る気持ちを育む機会にもなっていると思います」

西山校長は、今後について次のように話す。「これまで、国語や算数などの教科のカリ

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

図2

授業の振り返り、交流の様子

1学期の授業実践交流会

目的

- 1学期の授業実践を振り返り、意見を交換
- 自身の振り返りや他学年の教師との意見交換を通して、目指す子ども像についての成果と課題、2学期以降の取り組みについて学年団で話し合う

概要

- 「授業実践交流会」は1回20分×3回。各回、6グループが同時に行う。発表者は1グループ1人ずつ。他の教師は、グループを自由に選んで参加
- 発表者は、1学期の実践の一つについて、A4用紙1枚にまとめた指導案を基に、ねらいと取り組みを発表。聞き手の教師が意見を述べる
- 交流会後、学年ごとに集まり、交流会で得た知見などを共有しながら2学期以降の方向性について20分間検討
- 管理職は、交流会にも学年での話し合いにも参加。若手教師から話を引き出したり、担任が感じる課題を学校全体の課題として位置付けたりする

実践交流会：2年4組 算数「たし算とひき算」

- 単純な加法減法の計算は出来るものの、文章題を苦手とする児童が多いため、文章題の数値を読み取り、テープ図を用いながら適切な演算を導くことをねらいとした。コミュニケーション能力を育むため、ペア活動を取り入れ、話し合いを通じた課題解決を目指した
- 「ペア活動が、教え合いのようになってしまった」という担任の涌井学先生に、新崎教頭は「3年生の担任の発表を聞き、発達段階としてペア活動は難しいと感じた。教える過程でも学びがあるので、教え合いでもよいのではないか」とアドバイス



学年での話し合い：5年生

- 主な意見**
- 「他の学年でも、自分の意見を言えない子どもへの対応や、グループでの話し合い方に課題があることが分かった」
- 「1学期はグループでの話し合いを行ってきた。2学期は練り合いをより充実させ、友だちをリードできる子どもを育てていきたい」



*同校の資料を基に編集部で作成

生活・のびやか(「総合的な学習の時間」)実践交流

目的

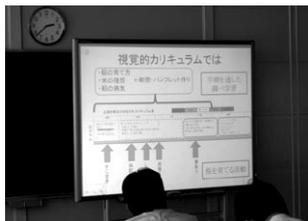
- 次の観点から1学期の実践を学年ごとに振り返り、成果と課題を明確化
- ①「春日を学びのステージとする」という共通テーマからみた取り組み
- ②「視覚的カリキュラム表」から見た他教科との横断的な取り組み

概要

- 各学年10分ずつ、学年主任が資料を基に1学期の実践を発表する
- 質疑・応答

発表の主な内容

- 他教科との関連を含めての振り返り。「生活科で行った畑作り・観察と、国語の「観察名人になろう」の単元を関連付けたことで、畑で作った野菜を、大きさ、色、手触りなどさまざまな観点から観察できるようになった」
- 実践を振り返りながら、2学期以降の授業の見通しについて。「1学期は、「のびやか」と社会科を関連させ、上杉謙信の精神を学習。2学期以降、地元・春日で働く人たちの交流を通して、今の自分が春日に対してどのような貢献が出来るかを子どもたちに考えさせ、実践させたい」
- 1学期に実践したことの成果と課題。「個人の調べ学習は充実したが、個人学習に終始してしまったので、2学期は、調べて分かったことや考えたことを発表し合う機会を増やしたい」



◎西山校長の講話 いずれの交流会も、最後に西山校長が講話を行った

- 「良かったのは、「子どもにこういう力が付いた」というように具体的ななまとめをしていた学年があったこと。「二つの力と二つの心」を各教科に落とし込み、実践することで力が付いたのか、付かなかったとしたら原因は何かを考え、積み重ねることが大切」
- 「授業は、先生方の「思い」によってつくられる。熱い思いがなければ、授業の構想をつくることは難しい」

西山校長が重視する

校長としての役割

最も大切なのは、学校の教育活動について自由に、活発に話し合える雰囲気をつくることだと考えます。子どもの実態に合うよう、今までの取り組みをどう生かし、どう変えていくか。これに教師全員が向き合えば、学校の特色は生まれません。

校長としての考えや学校としてのビジョンは「学校だより」などのプリントや職員会議で伝えていますが、それを基に具体的にどのような取り組みをするかは、多様な価値観を持った先生方に提案してもらいたいと考えています。先生方との信頼関係をより深められるよう、会議ではもちろん、日頃も私から積極的に話しかけて、考えを聞くようにしています。

「カリキュラムを高めたと思います」

カリキュラムは教科書の配列通りに進める学年が多かったのですが、グラントデザインをより実践に反映させるには、独自にカリキュラムを組み替える教科を増やす必要があると思います。子どもの力を伸ばしているのかを正確に捉えて、その原因を分析することで、カリキュラムをどう修正したらよいかが見えてきます。今まで以上に日常の子どもの姿をじっくり見取りながら、身に付けたい力を育めるカリキュラムを、教師一人ひとりが考えていける力を高めたいと思います」



担任と外部人材との役割分担を 管理職も協力して明確化

埼玉県蓮田市立蓮田南小学校

蓮田市立蓮田南小学校は、チーム・ティーチング（ＴＴ）で外国語活動を行う。

学級担任はＴ１として授業を進行させ、ＡＬＴや外国語活動サポーターはＴ２として発音・アクセントなどを教える。役割分担を明確にすることで、担任の学級経営力と外部人材の外国語力、それぞれの強みがより生きる授業になっている。

就任前の授業参観で 活動や役割分担の 目的がつかめる

蓮田市立蓮田南小学校は、全学年での外国語活動に２００７年度から取り組んでいる。

授業は、学級担任がＴ１として進め、教育委員会から派遣されるＡＬＴや、地域ボランティアとして登録されている日本人の「外国語活動サポーター」（ＪＴＥ。以下サポーター）がＴ２として指導に当たる（図）。

特に、来校頻度が高く、日本語でのやりとりが出来るサポーターの存在は大きい。それだけに、担任とサポーターの役割分担を明確にし、互い

の強みを生かす授業づくりが大切だ。倉持勝義校長は、その意義を次のように説明する。

「児童の個性や普段の様子を最もよく把握している担任が進行すれば、積極性が見られない場合に声掛けをしたり、アクティビティのルールを全員が理解できるように説明の時間を長くするなど、児童に対する細かな配慮が出来ます。外国語の正確な知識や発音はサポーターが教えるというように役割を分ければ、外国語を話すのに不慣れな先生の精神的な負担が減り、進行に集中できます」

サポーターには、就任前に外国語活動の授業を２、３回参観してもらい、活動の雰囲気や児童の様子を感じてもらおう。

年間指導案を共有し 短い打ち合わせ時間を 有効に活用

「外国語活動の目的がコミュニケーション能力の育成であることや、担任との役割分担のねらいを理解した上で、語学の知識を発揮していただきたい。その点をはっきりと伝えるために、校長の私が直接参観をお願いしたり、積極的に話しかけたりしています」（倉持校長）

担任とサポーターは、当日の朝学習の時間を使って打ち合わせを行う。15分程度だが、あらかじめ年間の指導案を共有していることで、限られた時間を有効に使えるという。

「サポーターには、その日に行うゲームの内容や教える表現を指導案で確認するなど、事前準備をしてもらっています。そのため、当日は授業の流れと時間配分を最終確認する程度で済みます。もし、実際の授業が発音練習に偏るなど指導案の意図からずれたと感じたら、それを授業後の休み時間にサポーターにきちんと伝えることも担任の役目です」（外国語活動主任の田中由美先生）

7年前からサポーターとして同校の授業に携わっている矢嶋寿恵さんは、担任との役割分担について次のように話す。

「子どもと日常的に接していない私たちには、集中していない子どもを、注意すべき場面なのか、注意す

図 外国語活動における学級担任と外国語活動サポーターとの役割分担

		学級担任の役割	外国語活動サポーターの役割
授業前			●指導案で当日のゲーム内容や教える表現をあらかじめ確認しておく
		●担任とサポーターは、当日の朝学習の時間(約15分)を使い、その日の授業の流れや時間配分について打ち合わせる	
授業中	あいさつ	●サポーターと同様、英語で話し掛ける ●サポーターの児童への問いかけに対し、絵やジェスチャーでヒントを出す	●全体に声を掛ける ●日付、曜日、天気などを英語で尋ねる
	歌	●必要に応じて、サポーターの説明を日本語で補足説明 ●CDなど、機器の操作	●発音や歌詞の指導 ●意欲的に歌う児童を英語で褒める
	導入	●スキットのデモンストレーション(英語で/日本語で) ●児童と一緒に発音 ●絵やカードの提示	●スキットのデモンストレーション(英語で) ●発音の指導
	本時の主活動	●ゲームの仕方を日本語で補足説明し、児童からの質問を受ける ●サポーターと一緒にゲームのデモンストレーション ●ゲームをするグループ編成を指示 ●児童と一緒にゲームに参加	●ゲームの仕方を英語で説明 ●学級担任と一緒にゲームのデモンストレーション ●積極的にゲームに参加する児童を褒める
	まとめ	●児童に感想を聞く ●次時の予告 ●授業の評価 ●あいさつ	●授業の評価 ●児童一人ひとりと視線を合わせてハイタッチをして別れる ●あいさつ
授業後	●授業の反省点などがあれば、休み時間を使って担任からサポーターに伝え、共有する ●次週分の打ち合わせ		

●授業の進行
●活動にとまどう児童のサポート
●積極性が見られない児童への声掛け

* 同校の資料を基に編集部で作成

るにしても、何と言ったら良いかが分かりません。先生方には、『外国語が分からなかったら私がフォローするので、間違いを恐れずに、学級経営の延長で堂々と進行してください』と伝えていきます」

倉持校長は、今後について次のように話す。

「学級経営のスタイルに応じて、先生ごとに多様な授業の形が出来るのが理想です。そのためには、サポーターに頼りきるのではなく、担任自身が徐々にインプットを増やしていったほしいと思います。先生方には、他校の研修会にも積極的に参加するよう呼び掛けています。その際、単に見学するだけでなく、自分ならどうするかを考えてもらいたい。研修後には、今後の授業について自分なりの改善点や

工夫を書いて提出してもらい、職員会議などで全員が共有し、指導案にも反映します。全教師が課題意識を持ち、自信を持って進行できる方法を考えることが大切です」

School Data

埼玉県蓮田市立蓮田南小学校

概要 1892(明治25)年開校。2007~09年度、文部科学省の英語活動等国際理解活動拠点校の指定を受ける。ALTや外国語活動サポーターを積極的に活用しながら、すべての教師がT1として指導できる授業づくりを目指して研究を進めている。

校長 倉持勝義先生

児童数 683人

学級数 22学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒349-0111 埼玉県蓮田市東6-9-11

TEL 048-768-0074

URL <http://homepage3.nifty.com/hasudaminami/>

研究発表会予定 2011年1月27日(木)



蓮田市立蓮田南小学校
倉持勝義 Kuramochi Katsuyoshi
校長

「今日を真剣に学び、自分の夢をかなえる力を身に付けようとする子どもを育てたい」



蓮田市立蓮田南小学校
田中由美 Tanaka Yumi

外国語活動主任 6学年担任

「褒めることによって、子どもの意欲や積極性を引き出したい」

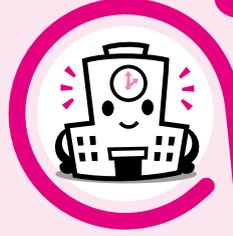


蓮田市立蓮田南小学校
矢嶋寿恵 Yajima Toshie

蓮田市外国語活動サポーター

「外国語に対する親近感と、世界中の人々への関心を育てたい」

つながる



学校と家庭の学び

保護者を通して

社会性を学ぶキャリア教育

東京都足立区立東伊興ひがしいこう小学校

足立区立東伊興小学校では、保護者や地域と連携して、全学年・全教科でキャリア教育を行っている。保護者は、児童の学習に対する真剣な表情や学ぶ喜びを見ることができ、学校の取り組みへの理解と信頼を深め、学校公開週間には千人以上もの保護者が訪れるという。

身近な社会人である保護者に規範を示してもらいたい

足立区立東伊興小学校は、キャリア教育の推進を学校教育の柱と位置付けている。2008年度、足立区教育委員会の研究奨励校に指定されたのを契機に、全学年・全教科で取り組み始めた。高橋守穂校長は、そのねらいを次のように説明する。

「小学校のキャリア教育に求められるのは、具体的な進路・職業指導ではありません。社会で生きていくための基礎を築くこと、すなわち、

社会性を養ったり、働くとはどういうことかを考えることです。本校では、それを『かかわる力』『活用する力』『見通す力』『やりぬく力』と位置付けて、1年生からこれらを意識した授業を行っています」

キャリア教育を保護者と連携して進めているのも、同校の特徴だ。

「地域とのかかわりが薄れ、共働きの家庭が増えたことなどにより、子どもは大人とのコミュニケーションが不足しています。子どもにとって最も身近な社会人である保護者にこそ、社会性の規範を示してもらおう

ことが大切だと考えました」（高橋校長）

中心となる取り組みは次の二つだ。

■職場体験学習

6年生の夏休みに行うグループ学習で、担任と一緒に自分や友だちの保護者の職場を訪れ、保護者が働く様子を見学し、インタビューを行う。

「就きたい職業を見つげるためではなく、働くことの大変さや、働く人の思いや仕事のやりがい、誇りを学んでほしい。当日は見学に加えて、介護センターを訪れた子どもは実際に車いすを押してみるなど、出来る

だけ働く体験をさせるようにしています」（高橋校長）

担任は、4月から保護者会やプリントなどで協力を呼び掛け、訪問日時を調整。09年度は、児童全員が自分や友だちの保護者の職場、または保護者が紹介した職場を訪問した。

■キャリアアドバイザー(CA)の授業

学年・教科ごとに年間5組ずつ、地域の人を中心に外部からCAとして人を招き、授業に参加してもらう。高齢者が戦争体験を語ったり、地域の農家が米作りを教えたりするなど、身近な大人と数多く接することで、

生きるとはどういうことかを多面的に知る機会を設けている。

CAの人選は、授業のねらいに応じて、学年団で行う。取り組みを始めてから2年間で、計70組に上った。

保護者がCAとなる場合は、掃除や洗濯など家事の仕方について説明



5年生の家庭科では保護者がCAとなり、手縫いやミシンがけを教えた。保護者にとっても、新しい知識に触れられる子どもの喜びを間近で見る機会となっている

車いすを押したり、保育園・幼稚園児の世話をしたりと、仕事の一部を実際に体験することで、仕事の大変さややりがいに対する理解が深まる



したり（1年生の生活科）、ミシンの使い方を教えたりする（5年生の家庭科）など、普段から行っている生活の技術・工夫を伝える。「CAとして授業に参加することで、保護者自身が、子どもにとって『学び』の対象になっている自覚が

高まります。また、子どもが真剣に学ぶ姿や理解する喜びの表情を見れば、学校の取り組みへの理解が深まるといふメリットもあります。生き生きとした子どもの様子を知った保護者は、普段の授業も見たくなくなるでしょう。学校公開週間には、毎回千人以上の保護者が訪れます。平日でも仕事の都合をつけて参観する方もいます」（高橋校長）

保護者の学校に対する理解の深まりは、6年生とその保護者が学校の外堀の清掃・塗装を行ったことにも表れている。キャリア教育に取り組み始めた08年度から3年間で、約250メートルの堀をすべて塗り替えた。自分の行動を通して子どもにボランティアの精神を教えたいとい

うPTAの提案により、3年にわたる卒業制作として行った。

子どもは人のかかわりを大切にできるようになった

キャリア教育の成果は、保護者との連携強化だけでなく、児童の変化にも見て取れるようになった。

「朝会などで落ち着いて話を聞けるようになりましたし、登下校時に元氣よく挨拶したり、自発的にCAにお礼の手紙を出そうとしたりするなど、成長を感じます。友だちに親切にしてもらった時なども積極的に感謝の気持ちを伝えていようです」（研究主任の松澤雄一先生）

松澤先生は、キャリア教育で学んだことを自分のものとして考え、自

東京都足立区立東伊興小学校

◎1971（昭和46）年開校。2008年度、足立区教育委員会の研究奨励校に指定され、保護者や地域の人など身近な大人から社会性を学ぶキャリア教育を推進している。

校長 高橋守穂先生

児童数 616人

学級数 18学級

所在地 〒121-0801

東京都足立区東伊興1-4-15

TEL 03-3897-5341

URL <http://www.adachi.ne.jp/users/adhiik/>



足立区立東伊興小学校校長

高橋守穂

Takahashi Morio

「明るく、仲良く、たくましく、互いに磨き合い、豊かに表現できる子どもを育てたい」



足立区立東伊興小学校

松澤雄一

Matsuzawa Yuichi

研究主任

「子どもに自分の良さや可能性を気付かせ、それを伸ばせるように支援していきたい」

分の気持ちを順序立てて相手に伝えようとする様子も見られると話す。

「6年生は、職場体験学習の感想を夏休み明けにグループ内で話し合っ

てまとめ、友だちの前で発表します。友だちの発表を聞くことは、自分たちの訪問した職場との共通点、

『病院を訪問して、人の命を守る職

図 わたしの夢デザインシート

自分の長所や得意なことを記入し、「今の自分」を確認する。これまでの学校生活やCAから学んだことを振り返り、今後、それをどう生かしたいかを考える。中学校の授業見学や部活動見学、中学生へのインタビューなどを通して中学校生活を想像し、中学校で頑張りたいことを言葉にする。更に、中学校以降の自分像をふくらませ、将来の夢や目標を出来るだけ具体的に書くことで、夢や目標に向けて努力する姿勢を育む。シートは、足立区教育委員会が作成したものを、同校の実態に合わせてアレンジして使っている

業の責任を感じました。応急手当の方法を教えてもらったので、友だちがケガをした時に役立てようと思います」など、多くの子どもが、何を学び、それを今後どう生かしていくかを言葉にしていました。CAへのお礼の手紙にも、感謝の気持ちと共に、自分の心がどう動いたかを伝えられる子どもが増えています」

6年生は、冬休み明けに将来の目標を「わたしの夢デザインシート」(図)にまとめる。ここでも、目標を実現する上で今の自分に何が足りないかを客観的に把握し、中学校でどう伸ばしたいかを自分の言葉で表現する子どもが目立つという。

「相手の話をきちんと聞き、相手



授業でご活用いただける、キャリア教育に役立つ冊子『ジブンよススメ ワークブック』 予約受付中!

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2009年度は、のべ約8,200校から約125万冊ものお申し込みをいただきました。今回、①小学5・6年生の児童向けに、授業で使えるキャリア教育冊子「ジブンよススメワークブック2010」、②小学6年生の児童向けに、学び方のコツがわかる冊子「中学校に入って役立つ! 自宅でやっている3つのルール」を無料でご提供いたします。ただ今、予約受付中です。詳しくは巻末のカラーページのご案内をご覧ください。ぜひ貴校の教育活動にお役立て下さい。

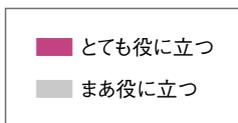
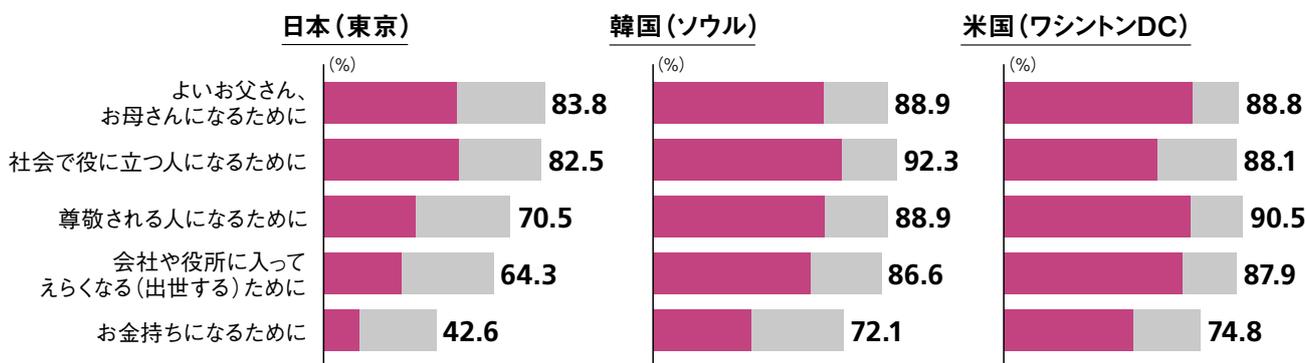


学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>



日本の小学生は勉強の役立ち感がやや弱い

学校の勉強が次のことにどのくらい役に立つと思うか(10~11歳の小学生)



日本はすべての項目で、「役に立つ」と答える比率が他国の小学生と比べて低い。とりわけ「とても役に立つ」比率が低く、学校の勉強の役立ち感が弱い

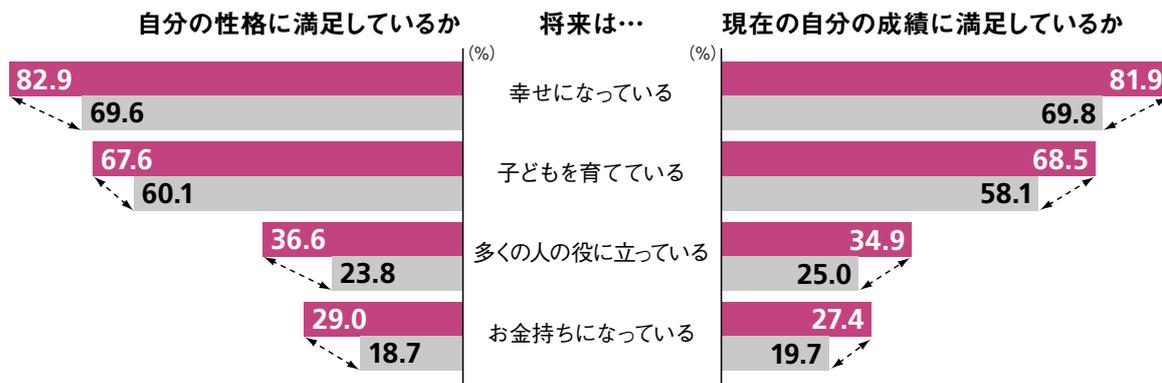
注) 値は、「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計

出典: Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査」

調査時期は、2006年6月~07年1月、調査対象は、国際6都市(東京・ソウル・北京・ヘルシンキ・ロンドン・ワシントンDC)における10~11歳の小学生。
調査方法は、学校通しによる自記式・Web調査

自分の性格や勉強への満足感が前向きな将来観につながる

現在の満足度別に見た将来像(小学4~6年生)



現在の自分の性格や勉強の成績に満足している子どもほど、前向きな将来像を思い描く割合が高い。なお、この傾向は、中学生も同様となっている



注) 値は、「とても思う」と「まあ思う」の合計。各項目の「満足」は「とても満足している」と「まあ満足している」の合計、「不満」は「あまり満足していない」と「ぜんぜん満足していない」の合計

出典: Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」

調査時期は2009年8月~10月、調査対象は全国の小学4年生~高校2年生(うち小学生は3,561人)、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査



上記の関連データはコチラ!
<http://benesse.jp/berd/>
*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2010 Vol.2へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎教育課程説明会の時にも、「言語活動の充実」はよく話題に上ります。文教大の鳴島先生と越谷市教育委員会の小林先生の対談では、「目的」「意義」「授業づくりの考え方」にポイントが置かれ、大変すっきりしました。また、鹿児島市立田上小学校・和田校長先生の言葉で、「教師の役割の一つは、子どもたちに好奇心の種をまくこと」がとても心に残っています。自分も少しでも近づきたいと思いました。 [山梨県／I小学校／H・A]

◎越谷市立蒲生がもう小学校が実践されていた、年間指導計画を1枚にまとめる方法や、「ことのはノート」「ごいカード」、意見の言い方の指導は実践的であり、取り入れたいと思いました。美濃加茂市立蜂屋小学校の実践は初めて聞きましたが、PTAから働きかけていることが素晴らしい、家庭の基盤がしっかりしている地域なのだろうと思いました。 [神奈川県／O小学校／K・S]

◎越谷市立蒲生小学校と横手市立十文字第一小学校の実践では、言語活動を各教科に具体的活動として盛り込む過程や、例示の内容等が勉強になりました。両校とも、言語活動を表現力とセットで考え、かつ、相手あつての表現力という考え方をしている点に同感です。13ページにある、蒲生小学校・山下校長先生の「学習には感動を与えることが必要」という部分にとっても共感し、そうした教師集団にする必要性を強く感じました。

[岩手県／D小学校／K・T]

◎横手市立十文字第一小学校は、自校と学校規模が近いためか、学校課題も似ていると共感できました。特に、「育てたい国語力」を全教科で押さえていることや、子どもが発信する「学びの技」は、分かりやすく効果的な方法で活用できると感じました。 [福島県／H小学校／K・T]

◎横手市立十文字第一小学校の「聞くこと」についての「学びの技」系統表に興味を持ちました。本校も2年間にわたって「きく」をテーマに研究しており、内容を合わせながら勉強しました。 [鹿児島県／O小学校／O・H]

◎本校でも話し合い活動に力を入れています。綾川町立滝宮たきのみや小学校の「話し合い方シート」は複式授業でも活用できそうだと思います。 [北海道／C小学校／F・M]

◎綾川町立滝宮小学校の記事では、具体的な授業改善の方向性が示されていたので、じっくり読みました。座間市立入谷小学校の外国語活動の記事では、新しい試みとして1～4年生の担任もT2からT1へと実践している点がよいと感じました。「今日のひとこと活動」も心に残りました。 [徳島県／T小学校／F・T]

◎鹿児島市立田上小学校の和田校長先生の記事を読み、良い先輩が良い人づくり(教師づくり)をする、そして、それが輪廻のようになっていくことを感じました。我々も後輩教師を導いていかなければなりません。

[埼玉県／H小学校／K・K]

◎座間市立入谷小学校の記事の「外国語が分からなければ日本語で話しても良い」という部分に勇気づけられました。美濃加茂市立蜂屋小学校の記事では、弁当づくりは気負ってしまいそうな中で、コース設定をしたことに感心しました。

[千葉県／T小学校／K・T]

◎今までの学習は正解のみが強調され、間違ふことを恐れた子どもが発表を我慢していたと思います。言語力の育成を通して、子どもの間違いや考えが教室で生かされることを切に願います。 [愛知県／E小学校／I・K]

編集後記

お忙しい中で、カリキュラムをつくることは簡単なことではありません。しかし、カリキュラムをつくることで、先生方の日々のご指導がより有機的に結び付き、子どもたちに目指す力を付けていくことの近道が出来るのではないかと思います。この教育課程の改訂時期を、「どんな子どもを育てたいのか」「そのためにはどんな計画や指導が必要か」を少し立ち止まって考える良い機会とするために、今号が校内での一資料となれば幸いです。(青木)

VIEW21 小学版 2010 Vol.3

2010年11月11日発行 / 通巻第26号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
大日本印刷(株)

印刷製本 (有)ペンダコ
編集協力 二宮良太
執筆協力 荒川潤、川上一生、筒井岳彦
撮影協力 イラスト協力 浅沼リカ、幸 剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 03-5371-1238

〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010